7549
特8
459

真田三代記
上田籠城

旭堂南陵講演

096513-000-8

特8－459

上田篭城（真田三代記）

旭堂　南陵／講演

M36

DBS－0227

博多成象堂新版發行目錄

旭堂南陵講演 山田都一郎速記 眞田三代記 正價廿五錢 郵稅六錢

旭堂南陵講演 山田都一郎速記 眞田三代記 信州咨戰 正價廿五錢 郵稅六錢

旭堂南陵講演 山田都一郎速記 眞田三代記 三國峠大合戰 正價廿五錢 郵稅六錢

旭堂南陵講演 山田都一郎速記 眞田三代記 長篠咨戰 正價廿五錢 郵稅六錢

旭堂南陵講演 山田都一郎速記 眞田三代記 夫目雷 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 西鄉大隆盛 正價廿五錢 郵稅六錢

松林伯圓講演 女盜賊 兒雷也 正價廿五錢 郵稅六錢

松林伯圓講演 須鱗新日藏 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 兩越大評定 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 荊難波戰記 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 加賀騷勤 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 柳生但馬守 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 柳生飛驒守 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 德川天一坊 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 山內伊賀之亮 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 加賀松桃太郎 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 次松桃太郎旅日記 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 次松桃太郎後日談 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 長谷部國太郎 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 冬合戰 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記 夏合戰 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記後日談 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 難波戰記後日談 眞田太助 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 慶安太平記 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 慶安太平記 由井正雪 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 慶安太平記 丸橋忠彌 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 中山問答 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 中山大問答 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 伊賀越後日仇討 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 曉星五郎 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 曉星五郎 阿波騷動 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 あざみ小僧 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 あざみ小僧 ぬかり松 正價廿五錢 郵稅六錢

神田伯龍講演 丸山平次郎速記 俠客國定忠治 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 豪傑笹野權三 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 長門守木村重成 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 關東俠客 腕の喜三郎 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 俠客小狐靈三 正價廿五錢 郵稅六錢

石川一口講演 丸山平次郎速記 義賊鼠小僧 正價廿五錢 郵稅六錢

春曉亭夢山講演 今井五郎速記 朝比奈彌太郎 正價廿五錢 郵稅六錢

藤井肩龍講演 山田都一郎速記 加太彌太郎 正價廿五錢 郵稅六錢

玉田玉秀齋講演 山田都一郎速記 加太義勇傳 正價廿五錢 郵稅六錢

旭堂小南陵講演 山田都一郎速記 關口八郎 正價廿五錢 郵稅六錢

438
459

眞田三代記

上田籠城

旭堂南陵講演
山田都一郎速記

第一席

本日より眞田三代記第六篇と致しまして、彼の有名なる上田籠城のお談を申上げます、抑も日本始まつてより以來何所の合戦が大きいの、ヤレ著名いのと申しましても、恐らく關ケ原はど大きな合戦はございますまい、されば之れを天下分目の大合戦と稱へまする、既に前篇にて御披露に及びました通り、茲に徳川家康殿は奥州會津の城主上杉景勝を征伐いたさんと、五萬八千有餘名の軍勢を驅催されまして、野州小山まで進發致されま

した、このとき石田治部少輔三成は小西攝津守行長と相談をいたし、内大臣秀頼公の内命であるから、豐臣の天下を奪ひ取らんとする德川家康を討ち取らんと、太閤殿下秀吉公恩顧の大名を談合ひ、十三萬八千有餘名の同勢を從へまして、先づ手初めに城州伏見の城を攻め落し、その勢ひを以て濃州關ヶ原に旗擧を致しました、早くもこの事が小山へ知れますと、家康殿はこの上もなく御心配でございます、何故斯樣に御心配になつたかと云ふと、前には上杉景勝と云ふ猛軍あり、後には石田、小西大谷、長曾我部などの大軍がある、なほ自分の四邊に控へて居りまする者は、加藤、福島、黑田、淺野、生駒などゝ云ふ、何れも太閤殿下取立の大名でございます、また石田三成の言條が内大臣秀頼公の内命であるとして見ますれば、取りも直さず豐臣秀吉公御子息の命令でございますから、豐臣取立の大名は擧つて德川を討つものに相違ない、卽ち今まで味方と思つて居り

ました四邊の大名は悉皆敵となつてしまふのでありますから、流石の德川家康殿もたゞ茫然といたし、何所から手を着けたら宜いか分らぬと云ふ始末でございました、茲に德川の家來に本多佐渡守正信と云ふ仁がございますが、これは人呼んで疊の上の孔明と申しまして、疊の上に座らして意見を吐かせたならばどんな大きな城でも國でも構はない、一番顚覆して見せやうと云ふ大器量の仁でございます、佐渡守正信を呼んで家康「佐渡、正信「ハイ家康「予は進退維に谷まつたり、今は如何とも致方がない、速に切腹をいたさん、後は其方宜きに計らひ吳れ」と仰しやると佐渡守正信は制止めまして正信「アイヤ我君、暫らくお待ちあそばせ、その仰は御道理にございますが、死は一旦にして易く生は得難し、君は御運に強き御方でござりますから、兎に角その御切腹はお待ちを願ひます家康「ムヽ、其方が如何やうに申し吳れても斯うなつた以上は仕樣があるまい正信「左樣でご

ざいます、如何にも四邊の諸將方はみな豐臣取立の大名でございますが、その中でも黒田甲斐守長政、これだけは豐臣の恩を受けて居りますが、此人に御相談をあそばしたならば、萬更相談敵手にならぬこともございますまい、先づこの仁を呼んで御相談をあそばしまするやう 家康「左樣か、然らば黒田を呼んで相談をいたして見やう」と云ふので、これから直ぐに黒田甲斐守長政の方へ、聊か内談をいたしたいことがあるから參り呉れヨと云ふお使者が立ちました、何故本多佐渡守正信が家康殿に向ひまして、この黒田長政をば勸めたかと申しますと、この黒田長政の親は黒田官兵衛孝高と云ひまして、甚しい恰悧な人でありましたから、太閤殿下秀吉公でさへもこの孝高には舌を卷いて驚かれたと云ふ、即ち太閤殿下が天下をお取りあそばすと、この人は勘解由次官孝高と相成りましたが、或時秀吉殿が孝高を呼んで、御酒を召上つて居られました 秀吉「孝高 孝高「ハイ 秀吉「

いま日本六十餘州において英雄豪傑も多數あるとは云ひながらその中で假令豐臣の天下たりとも、一番手を掛けて見やうと云ふ、智あり勇ある者は何人おやナ 孝高「左樣でございます、私のやうな者には分り兼ねますから、誰彼れとは云はれませぬが、先づ中國の毛利輝元などは十有余ヶ國を切り從へました大名、此者でございませう 秀吉「イヤ〳〵違ふぞ、毛利輝元は父祖の餘德に依つて、あれだけを保つて居るものであるから、天下をば望むなどゝ云ふことはない 孝高「然らば誰でございます 秀吉「左樣おやナ、予の目から見ると僅た一人あるぞ 孝高「ハヽッ 秀吉「予の目の前に居る奴おや 孝高「それは何所でございます 秀吉「目の前おやと申すのである 孝高「目の前とは……秀吉「まだ分らぬか、恐らく天下をば望まうと云ふ者は、黒田勘解由次官孝高と云ふものおやあい 孝高「エーッ」と黒田孝高は思はずタラ〳〵と冷汗を流しました、それはさうでございませう、この人は一番天下をば

斯うして呉れんと云ふ了簡を有つて居る人で、珍しい器量のある人物です、それをば看破いた秀吉殿も豪いものでございます　孝高「恐れ入りましてございます、最早我心中を看破られました上は、斯の通りにござりまする」と云ひながらお次へ辷つて坊主を呼び、頭の髪をばプツリと切つてクル〳〵と頭を丸め、再び御々々と進み出まして孝高「私は如水軒と名を改め、今日より隠居を仕りますから、何卒惟甲斐守長政に跡目相続のお許しを願ひます　秀吉「ム、、流石は孝高、其方が左様までの心に相成つた上は、予も安堵をいたしたわい、嫡何にも跡目は悴長政に相続を申附くるであらう　孝高「有難う存じます最早殿下に我心を見抜かれました上は、水は方圓の器に従ふと申しますが、実に私の心は水のやうなもの、即ち従来の望は水の泡になつてしまひましたから、この後は何でも殿下の仰しやる通りになりませう、即ち圓い所へ入れられたら圓くなると云

ふ点を以て、如水軒と名を改めましてござりまする」とつひに孝高は如水軒となつて隠居を致しました、その跡をば甲斐守長政が継いだのでございますが、これ又恐しい悧巧な人で、よく太閤殿下秀吉公の御機嫌を取り、徳川家康殿の御機嫌をも取る所謂当今で云へば八方美人のお方でございます、併しこの八方美人と云ふものは、餘程器量がなければ出来ませんそれをば見抜いて居る本多佐渡守正信ですから、この長政に相談をすれば何とか器量を出して呉れるだらうと云ふ積りでございます、此方は黒田長政が徳川から御使者が来たが容易に行けません、何故なれば自分は徳川を敵に廻さねばならぬかも知れませぬから早速後藤又兵衛基次、栗山備後、毛谷下総、母里太兵衛なぞゝ云ふ家来を呼んで長政「只今徳川家康より斯々の使者が参つたが如何いたしたらば宜いか、このたび石田、小西等が關ケ原に旗幟をいたしたが、善か悪か、また予は徳川を討つて可い

か否いか未だ思案が定まらぬ、其方共は我家の爲であるから何事も腹藏なく申して呉れロ」と云ふとズッと前へ進み出ました栗山備後 備後「仰にござります、石田、小西の關ヶ原の旗擧は秀頼公の内命などゝ申して居りますが、それは以ての外のことでござります、未だ十歳未滿の若君が、何故德川を討てよなどゝ御意あそばされませうや、殿下秀吉公の御崩御のときに、何と御遺言をなされました、秀頼十五歳に相成るまでは德川、前田の兩家に天下をば預けるであらう、其方共は守護いたせとのお言葉であつたではござりませんか、併し前田殿は御逝去になりまして、今では德川殿御一人、兎に角若君が十五歳にお成りあそばすまでは殿下秀吉公にお代りあそばす御方でござります、然るに石田、小西の旗擧、これぞ兩名が秀頼公のお名前を欺り豐臣取立の大名を謀つて德川を討たさんと云ふの遠謀、即ち石田、小西の謀叛に相違ござりません、迂濶り罠りたまふ所に在

らず、これは速に德川をば助け、石田、小西をば討つ方が眞の忠義かと心得ます、恐れながら君の御賢慮を伺ひ奉ります」と流石黒田の元老、大器量人の栗山備後利安、滔々と述べ立てましたときには、列座で居る方々も實に道理であると、互ひに顔を見合して居りましたが、その中でニヤリ〳〵と笑つて居りますのは、たゞ後藤又兵衛一人であります、すると甲斐守長政は栗山備後の言葉を聽きまして 長政「アヽ備後、其方はよく申して呉れた、予は其方の心と同樣であるわい、然らば德川の招きに應じて罷り越さん、併し他の諸侯方は如何ぢやらう 備後「されば家康はなか〳〵の心配の余り、恐らく大勢の大名の中から、貴將御一人をば招くに相違ござりませぬから、德川に充分の忠義を盡し、恩を着せて置くのも御當家の爲でござります 長政「その恩を着せると云ふのは如何いたすのぢや 備後「左樣でござります只今より私は大勢の大名をば說いて廻りまして、みな德川へ隨

身をさせ、而してその判を取つて參りますから、貴將はそれを
ば土產にいたし、家康にお會ひに相成りますれば、家康は何程
悦ぶかも知れませぬ、さすれば家康も長く貴將の恩は忘れます
まい、これが即ち黑田のお家の爲でござります 長政「ムヽ、左樣か
然らば早々取計らへ 備後「ヘヽッ 長政「さりながら暫らく待ていコ
リヤ〳〵 又兵衛、其方は先刻より一言も發せねが如何ぢや」と
云はれて後藤又兵衛基次は 又兵「左樣でござります、なか〳〵備
後利安は立派なことを申述べました、併し私の了簡とは大いに
違ひます、如何にも備後利安の云ふ通り、これは石田、小西の
計略に相違ござりませぬが、恐らく德川家康は秀頼殿が十五歲
に相成られましても、容易に天下をば渡すものとは思はれませ
ぬ、されば後に德川を討たんといたしても、最早德川の方では
充分に準備が出來ますから、なか〳〵討てる氣遣ひはござりま
せん、實際豐臣へ忠義のお心があるならば、これを幸ひに德川

家康を討ち取り、而して後に石田、小西の逆賊を亡ぼすが宜か
らうかと考へます、君の御賢慮を伺ひ奉りまする」このとき黑
田長政はそれほど深き考がない、いま備後の一言を聽いて、ア
ヽ備後は立派なことを云つたわいと感心して居る所ですから、
後藤は他人をば疑つてゐんなことを云ふのであらう、德川がそ
んなことをする氣遣ひはないと思ひまして 長政「イヤ又兵衛、い
ま備後の云ふ通り、此所で德川を討つのは太閤殿下の御遺言に
背くやうなものぢや、予は矢張り德川を助くるであらう、左樣
に心得い 又兵「ヘヽッ、君がそれほどにお心を定められましたら
ば、最早それまでのことでござります、私は最早一言も申上ぐ
る所はござりませぬ、恐らくは諸侯の中でも信州上田の眞田父
子は家康に從はれますまい、アヽ是非に及ばぬ、今此所で德川
を討ち損ふのは龍を大海に放つがごとく、また猛虎をば廣野に
放つやうなものでござりまする」と吻と一息吐いて嘆息を致し

ましたが、實に後藤又兵衛の推量は違ひませなんだ、併し又兵衛はもつと長政に突き蒐つて云ひさうなものですが、又兵衛は長政とはカヲリと氣が違つて居ります、何故なれば黒田長政の親の隠居になつて居る如水軒が、毎度長政に向ひまして、一お前は秀吉公の氣にも入れば徳川の機嫌をも取る、お前のやうな者に家を繼がして置いたならば、黒田の家が大丈夫である、滅多に潰す氣遣ひはない、併しお前の代になつたならば、最早後藤は從ふまいと、毎々云つて居りましたが、實にその通りでござ いまして、後藤又兵衛は何事も潔白ですが、黒田長政はたゞ自分の家を大切に思つて事を計はうとするから、何うしても氣が合はない、毎度意見が反對いたして居ります、後藤又兵衛は心の中に又兵衛、此仁の氣象はこれだ、いま逆つて議論をいたしても到底無益だわい」と見越して居りますから、後は口を閉んでしまひました、そこで栗山備後の申條が立ちまして、これから備後は準備をいたし、第一番に加藤肥後守清正の陣中へ參りまして備後恐れながら肥後殿へ申上げます、此度の關ケ原の合戦に就いては、貴將は何う云ふ御了簡でございますか」と云は れて加藤肥後守も徳川を討つて善いものが悪いものかと云ふ御考中でございましたから清正「備後、其方は何と心得る 備後「へゝ、私の了簡は斯樣々々でございまする」と前に黒田長政に云つた通りのことを述べますと 清正「フーム、左樣か、よく云つて呉れた、成程其方の云ふ通り、秀頼公が十五歳に相成らるゝまでは、徳川殿に天下をば預けられたのである、然るにその人を殺しては殿下の御遺言に背くと云ふものぢや、宜い〳〵、予も速に徳川へ味方をいたさう 備後「然らば味方をいたされます證據として、これへ御判を願ひます 清正「承知をいたした」と加藤清正は速に判を捺しました、その次ぎに備後は淺野幸長の所へ參り、同じく言葉を盡して說き立てますと、これ又承知をして判

を捺しまする、斯のごとくにいたして多數の諸侯方はズッと判を捺しました、その中に備後は福島正則の陣中へ歩つて參りますと、何だか嗷々と騒いで居ります、この福島左衛門大夫正則と來たら、橘屋の悴の市兄哥、もう思慮も分別も薄い人だからブッ〳〵と怒つて居る　正則「サア其方共は準備をしろ、内大臣秀頼公の下知とあれば猶豫は相成らぬ、徳川の首を打ち落し、これを上方へ提げて行くのだ」となか〳〵の勢ひでございます、備後は早々面會をすると　正則「オヽ栗山備後か、何ぢや　備後「貴將は此度の一條について何う云ふお考でございます　正則「いよ〳〵面白くなつて來たぞ、拙者は家康の首を提げて大阪へ引ッ返す了簡ぢや　備後「ヘヽア成程、然らば貴將は石田、小西の云ふことをお聽きあそばすか　正則「イヤ石田、小西の云ふことは聽かない、内大臣秀頼公の内命ぢや　備後「これはしたり、怪しからぬことを云はれます、まだ漸う九歳くらゐの若君

が、ヤレ徳川をば討てよなどゝ仰せられるものですか、よく考へて御覽あそばせ　正則「ふヽー　備後「これは恐らく石田、小西の計略でございます、貴將がそんな計略に乘つて、徳川の首などを提げますと、石田、小西の機關に使はれますぞ　正則「成程　備後「貴將は石田、小西の手下になりますか、乾兒ですか　正則「だまれッ不禮なことを云ふな、乾兒とは何だ　備後「なれども貴將は石田、小西の手先に使はれるのでせう　正則「イヤ石田治部少輔などゝ云ふ螢大名、小西行長などゝ云ふ藥屋大名、あんな儕輩は大嫌ひだ　備後「そんなら何故石田、小西の云ふことは、聽きなさるのです、斯う云はれますと、正則も石田、小西とは仲が惡いから、直ぐに合點が參りまして　正則「アヽ備後、よく云つて呉れた、然らば早々徳川へ味方をいたさうと、直ぐに承知をいたし、これも判を捺しました、斯くて備後が一番最後に廻りましたのは、眞田安房守昌幸の陣中でございます、然るに安房守昌幸は此度

の一條を承はり、悴幸村と相談をして居るところへ、栗山備後が訪つて來たと云ふから、昌幸「幸村ヘイ、昌幸「黒田の栗山が參つたと云ふが、何用ぢやらう」幸村「お父上、それは何用でもござりません恐らく彼れは辯舌を以て我々をば說き伏せてしまひ、德川へ味方をさせて、石田、小西をば討たせ、これを自分の功名にしやうと云ふ了簡に相違ござりません」昌幸「ム、左樣であらう、何は兎もあれ面會をしなければなるまい」と云ふので、これから備後を目通りへ呼びますと、備後は兩手を突いて「備後ハ、ツ昌幸「備後、●よく參つた、何事ぢや」備後「恐れながら此度上方よりの注進、實に由々しき一大事が到來を仕りました、さるながら賣將方は有名る大器量の御親子なれば、私のやうな者が言葉を發して申上ぐるまでもなく、石田、小西の計略たることは、茨より御承知でござりませう、それにつき各大名は無論、伊豆守信之殿、隱岐守信尹殿にもその談を致しましたら、忽ち御得

心の上、德川のお味方と相成られましたから、なにとぞ御親子に於かれても速にお味方を願ひます」昌幸「悴信之、弟信尹の兩名は德川へ味方をいたすやうなものではない、我々には深き思慮がある、其イ、斯の通り御斷を奏きました」昌幸「左樣が、この眞田父子は決して德川へ味方をいたさぬぞ」備後「ヘヽツ、失禮ながら御器量人の御親子にもお似合しからぬ御一言ではござりませぬか」昌幸「だまれッ、備後、我々は汝のやうな者の辯舌に罠つて、德川へ味方をいたすやうなものではない、我々には深き思慮がある、其次は何と申した」備後「ハヽツ昌幸「彼れは快く德川へ味方をいたす氣遣ひはあるまい」備後「ヘヽツ」昌幸「この馬の準備を整へて、豐臣の天下をば狙はんとする德川であるから、他くまでこれを討つの了簡である、其方は立歸つて左樣に申せ、我々は早や陣拂ひの準備をいたしたわい」備後「ヘヽツ、斯

くまで御決心に相成れば致方がございませぬ」と栗山備後は腹の中で成程後藤又兵衛の云つた通りだ、こいつは不可ないわいと思ひながら、悄々として陣中を出ました、このとき澤山の大名の中で不得心を云つたのは、眞田親子と美濃の小大名田丸中務と云ふ人の兩名でございます、この田丸と云ふ人も潔白な大名で、栗山備後に向ひまして中司「いかにも石田、小西の謀叛に相違なく、彼等が悪いのに違ひござらぬ、さりながら我儕は石田三成に謂ふに云へない恩義を受けて居るから、悪いと知つて石田、小西に附屬ひ、共に倒れるの心得なれば、この劍は出來ませぬと、斷然と斷りましたが、實に是等は感心な心懸でございます、さて栗山備後はズッと劍を取つて廻り、これを持つて甲斐守長政の陣中へ歸り、早速これを渡しますと、長政は一通り目を通し、直ぐに準備に及び、小山なる德川家康殿の陣所へ參り、お取次を以て、黒田長政お目通りを願ひたひと申します

と、家康殿は長い間暇を費して居りますから、もうこれは黒田も自分に敵對をするものぢやと思はれまして家康「佐渡、黒田は予に及向ふものに相違ない、予はもう黒田に會ふ用はないぞ」と仰しやると、お側に居りました本多佐渡守正信が正信「イヤ〳〵我君、強ち彼れは敵對をするとばかりも云はれませぬ、まづ〳〵お會ひあそばしまするやう」と無理に勸めて面會をさせましたそこでお目通りをいたした長政が長政「ハヽッ、遲刻の段重々恐れ入ります、さりながらお入用の品をば取揃へんが爲に暇取りましたので、イザ御覽を願ひまする」と差出しました一卷、家康殿は偶爾と御覽になると、何かクル〳〵と卷いた物だから、これを取上げ、パラリと開いて目を通し、思はずハヲ〳〵と涙を流された、これは心から悦ばしいと思つたから出た涙でございまして、男は悲しいときには、笑ひ、嬉しいときには泣くのが眞個でございます、女は悲しいときには辛抱が出來ないから、

オウ〳〵と泣き出しますが、男たるべきものは笑つて宜い、嬉しいときの涙が眞の嬉涙です、このとき家康殿は嬉涙を流し、思はず黒田長政の手を取上げ「家康、甲斐、ア、何も云はぬ、予は嬉しいぞョ」と暫らくの間長政の顔を眺めて居られたが、やゝあつて言葉を續ぎ「此度の御身の行動、予は死すとも忘れはいたさぬ、この恩賞といたしては、事鎭まつてから後に筑前一ケ國を御身に進らすであらう、これは當座の引出物である」と俗に臍夜と銘の刻つてある吉光の短刀をば身自ら差出されたから長政「ハヽッ、有難き仕合せにござります」この家康は實に此度の御身の行動、この家康は身にも命にも換へ難なく心得るから、何か御身に望があるならば、何なりとも叶へて取らさう、サアその望を云はれョ」と斯う云はれたときに、黒田甲斐守長政は長政「ホイ成程、後藤の云つた通りだ、これでは德川が秀頼十五歳に相成つても天下を渡す氣遣ひはないわいと、初めて氣が附いた

これは家康殿も嬉しさに餘つて口を辷らしたのでござります、何故そんなことが分つたかと云ふと、何なりとも御身の望を叶へて取らさうと云ふのは、實に大きな語でござりまして、苟且にも大名の望をば叶へやうと云ふのには、自分が天下を握らねば出來ないことでござります、我々のやうな輩の望ならば、些細な望ですから、それはもう叶へられますが、兎に角一國の城主に對して、その望を叶へて遣るくらゐであるから、もうこの人は豊臣に天下を返す了簡はない、いまから自分の天下の積りで居るのだと云ふことをば早くも看破つた長政がそれでは一番此所で願つて置いて遣らうと思ひまして、自分の悴に右衛門佐と云ふものがある、絶るやうなことがあつてはならぬと考へたから、長政「恐れながら德川三代、黒田三代、如何やうなことがあつても、家をば廢さぬと云ふお書附を願ひますと、斯う云つたときに、家康殿は宜

しいと仰しやつて筆をお執りになり『一徳川三代、黒田三代、一謀叛逆を除くの外は如何やうの儀是れ有るとも本領安堵たるべきものなり、甲斐守長政へ、徳川家康判』と認め了り、これをば長政へ渡されました。このお墨付が後に黒田屋敷と云ふお談に出るのでございます。サア斯うなりますと、最早真田父子は寸時も猶豫が出來ないと云ふので、早速信州上田へ引ッ返さんとする、此方は家康殿が本多平八郎に内命を下しますと、本多平八郎は真田伊豆守信之、同隠岐守信норと相談となして、上州安中口において真田父子の歸りを遮断めやうと掛りまする、一即ち真田父子小山陣拂ひの一條にござります。

第二席

物事の早く纏まることをば小山評定と言ひ、纏まり兼ねることを小田原評定と申しますが、この小田原評定と云ふことは、秀

吉殿が小田原をば征伐するについて、ヤレ降參をしやうか、抵抗をしやうかと、彼是評場をして居るうちに、スッカリ滅ぼされてしまつたから、斯様な言葉が出來ました、また其日に多くの諸侯が發言して、直ぐに徳川の味方をしやうと決つてしまつたから、早く決ることをば、小山評定と云ふやうになつたのでございます、然るにこのたび真田父子は先を見越し、いよ〳〵信州上田へ引揚ぐることになりました、すると徳川家康殿も恐るべき奴は真田父子である、如何いたさうかと思案に暮れて居られます、このとき本多平八郎は自分の家來梶金兵衛と云ふ者を呼んで平八「其方はこれより上州沼田へ參り、信之の妻すみに面會をなし、斯様々々に申し入れて參れい金兵「承知致しましたに」と直樣梶金兵衛は馬に鞭を加へ、腦々と沼田へ乘り込んで參りましたが、真田伊豆守信之の妻は本多平八郎の娘でございまして、名をおすみの方と言ひ、至つて賢い婦人でございます、そ

のおすみの方に面會をいたし、

まして金兵衛我君の仰せられましたには、お臭に當りまする安房守昌幸、並びに其御子息左衛門佐幸村の御兩名は、このたび德川へ抵抗をいたさんが爲に上田へ引返されます、去りながらこれを上田へ歸らせては相成りませぬ、德川に抵抗をいたすとあらば、取も直さず天下に抵抗をするの謀叛人、因てその途中においてに兩名の士を遮斷めなければならぬ、伊豆守信之殿も直ぐに後から乘り込んで之れを討たるゝやうになつて居りますからお臭とは云へ御舍弟とは云へ、天下の爲なれば致方がない、速にその準備あつて、首尾よく防止められまするやうと云ふことでござります」これを承はつた おすみの方は、自分の父親から言つて來たことですから すみ「承知を致しました」と忽ち合戰の備準に及び、家老の根津甚兵衛、望月宇兵衛、加島權之助を首め、その同勢五百人余りを從れ、女ながらも自ら大將となり、

沼田の城には深江庄兵衛、瀧川茂兵衛の兩名に五百有余人を附けて留守を護らせ置き、自分は安中まで出陣をいたし、臭弟とは云ひながら、天下の爲なれば美事に遮斷め奧れんと、鐵砲弓矢を揃へ、大石大木亂杭逆茂木を結び圍らし、橋の板を並べ騷け、今や遲しと相待つて居りまするは、勇ましくも亦適れに相見ゑました、此方は安房守昌幸、左衛門佐幸村の兩名が斯ることゝは夢にも知らず、穴山、由利、淺香、別府、海野等一同の士を從れ、信州上田へ引揚げんと、恰ど いま安中口へ蒐つて參りますと、こは奈何に一の同勢が嚴重に固めて居りますから何奴が此所を取切つたかと、籠手を翳して見ますれば、白地に六文錢の旗が翻翻と飜へつて居りますから 昌幸「ヤアこは心得ぬ旗印である」と能〳〵見れば、眞田伊豆守信之の妻おすみの方が、五百人ばかりの同勢を從へ、此所を防がんといたして居るものか、或は出迎ひに來て居るものか分らない、安房守昌幸

は回首りまして　昌幸「若狭」若狭「ハイ　昌幸「其方は彼れの陣中へ參り
すみに面會をいたし、如何なれば斯くの如く準備に及んで居る
我々をば出迎ひの爲か、將又如何やうな了簡であるかと、問ひ
糺して參れい　若狭畏まりました」と別府若狭は準備をいたし、
馬に乘つて乘り込んで參り、陣所の前に突ッ立つて　若狭「ヤア〳〵
陣中へ物申さん、われは安房の守昌幸の使者といたして參つたる
別府若狭と云ふ者なり、當手の大將に面會をいたしたい　○「暫
らく待たれヨ」と取次の者は奥へ通入りましたが、暫らく經つ
て出で來り　○通らッしやい」これを聽いた若狭はヒラリと馬
から飛び下りますと、二十名ばかりの雜兵が槍の穗先を揃へ、
若狭の周圍を取捲いたから、若狭は膽を潰し　若狭「オヤ〳〵、味な
の間柄でありながら、その家來が使者に參つたのに何ぞや敵の
同勢でも乘り込んだやうなことをする、無味の悪いことだわい」
と思ひながら、ズッと奥へ通ります丈なる髮を背

後へ下げ、簿紅梅の綾を畳んで鉢卷をなし、女ながらも武具を
身に着け、適れ勇ましき扮裝にて悠然と床机に腰つて控へて居
りまする、これぞ眞田伊豆守信之の妻おすみの方でありまする、
イヤ若狭は感いた　若狭「ヤアこれは女大將、なか〳〵威張つて居
るわい……ハヽッすみ「其方はお勇の使者若狭であるか　若狭「ハヽ、
ッ、使者の趣き餘の義に在らず、只今お勇御安房守昌幸殿と、
御舍弟左衛門佐幸村殿の御兩名が上田へ歸城いたさんと、漸う
此所まで參られたるに、斯樣に陣所を構へて居られますは何の
爲か、承知をいたしたうござりまする　すみ「だまれッ、其方は早々
立ち歸つてお父上に左樣申せい、妾が爲には現在のお勇並びに
御舍弟であるが故に、當所を御通行の際にはお出迎ひをいたし
城内へお案内を申し上げて、懇ろにお待遇いたすが道であると
は云ひながら、此度お勇には天下の謀反人石田、小西に一味を
いたされ、天下の主たる德川へ弓を引かんとなさるは、大いな

る心得違ひされば、天下の爲であるが故に、假令お身こは申しながら、戰國の風習是非に及ばず、易々此所をお通し申すことは相成りませぬ、強て通らんと思召すならば、潔く一戰に及ばれヨ、左あらば女ながらもお敵手を仕らんと云へ、目通り叶はぬ、立ちやー」と大きな聲で呶鳴り附けられた、流石の若狹も吃驚仰天若狹「サア大變だ、途方もない氣の强い嬶もあつたもの だ、男に突き蒐つて一番喧嘩をしやうと云ふのだナ、何しろ大變なことになつたわい」とその まゝ馬々と馬を乘り返し、昌幸の目通りへ出まして若狹恐れながら申し上げます 昌幸「なんぢや若狹、いかにも信之樣の奥方おすみの方、なか〳〵の御意でございましたから、私は黙いて立歸りました昌幸「ナニッ、さては怜の嫁が左樣なことを申して居つたか、不禮な奴である、假令何にせよ親に抵抗をせんとは何事ぞ、ヘヽア彼れは德川の臣本多の娘であるから、われを討た

んとするのぢやナ、憎くい奴だ、イデ此上は此關を突破つて通り呉れん」と、昌幸は威猛高になつて御立腹になる、すると側より幸村「アイヤお父上、暫らくお待ちあそばせ、その御立腹は御道理でございますが、流石は兄信之殿の奥方でございますが、これは早くも本多平八郎が吩附けたものに相違ございます、斯樣な關を擊破るは最と易きことながら、親子の間柄で弓を擲き、死人怪我人を出だすも心苦しき次第、いま此所で合戰をいたすよりは、事穩便に濟す方が宜しうございますから、たゞ一言を以て此所を開かして御覽に入れます 昌幸「フーム、幸村、それは如何いたすのぢや 幸村「私が使者を遣はしませう……コレ〳〵若狹 若狹「ハイ 幸村「其方はもう一度使者に行つて來い、若狹「イヤもう御免を蒙ります、なか〳〵 女でこそあれ、酷い勢ひでございまして、目通り叶はぬ、立ちやーと云はれました、幸村「アさう云ふな、もう一度行つて參れ 若狹「イヤ此度行きま

すれば屹と手荒いことをするに違ひございません、私も敵と思へば負けぬ氣で行つて來ますが、何しろ若殿の奥樣ですから、激しく抵抗をすることも出來ず、此度手荒いことをされては、第一私が災難ですから、どうかお助けを願ひます　幸村「イヤ〳〵此度は其方をば鄭重に扱ひ、おすみどのが泣くに違ひない、その秘傳をば敎へて遣らう　若狹「へイ成程、女の泣くのは一寸愛になるものですから、泣く方なら宜しい、何んなことです　幸村「斯樣々々に申せい　若狹「イヤ宜しうございます、ぢやア行つて參りませう」と若狹は再びおすみの方の陣所へヒヨコ〳〵歩つて參り　若狹「ヤア〳〵陣中へ言申さん　○「煩厭い奴だ、また來やアがつた……何でござるナ　若狹「いま一應お目通りを願ひたい　○「暫らく……」と取次は奥へ這入りましたが、暫らく經つと出て參り　○「通らッしやい」と又もや三十人ばかりの雜兵が槍の穗先を揃へ、若狹の周圍を取捲いたが、此度は若狹も莞爾笑ひ乍がら

ズッと奥へ通りますと、おすみの方は先刻より一層怖い顏をして居る　若狹「イヨー怒つて居る〳〵　すみ「コレ若狹、再び參つたのは何事ぢや、疾く返答をいたせ　若狹「左樣でございます、先刻のお言葉はいかにも御道理でございますが、お父君や御舍弟樣には、なか〳〵德川に抵抗をいたさうと云ふやうな御了簡ではございません、それは實際お疑と云ふものでございますから、速にお疑を晴されて、更めてお通し下さる樣とのことにござります　すみ「だまれッ、近頃お父上樣にも似合はしからぬ卑怯なお言葉今となつて女を欺るやうな辨解は何事ぞ、假令二心なきにもせよ、小山を引拂つて此所まで參られたのは、取も直さず德川へ抵抗をなさるお積りであらう、眞田の同勢は一人も通されぬ、コレ若狹、猶豫いたさば汝の首から打刎ねてしまふぞヨ　若狹「ソラまた怖しいことを言やアがる、何所まで氣の強い女か知れない……左樣でございますか、イヤ是非に及ばぬ、然らば立歸り

ませう」と起ち上つた若狭が、聽いよがしに獨言　若狭「ア、成程御主人の仰しやつた通り、七人の子は成すとも、女に心を寛すなとは此事である、信之殿のお心が察し入るわい」と云ひながら徐々歩み出しました、偶爾とこれを聽き咎めたおすみの方、すみ「若狭、暫らく待ちや　若狭「ヲヲこれから徐々泣かせるのだぞ……ハイすみ「其方は只今何と申した、いま一言申して見よ若狭、イヤ、此義ばかりは何卒御容赦を願ひます」と云ふと、おすみの方は手早く薙刀の鞘を拂ひ、流々と二振ばかり素振をなし、之れを小脇に抱込んですみ「若狭、只今其方は七人の子は成すとも女に心を寛すな、信之殿のお心が察せらるゝと云つたが、妾は聽捨に相成らぬ、その理由を申し述べよ、若しも述べぬとあるならば、其方の首は胴に附けて置かぬぞ、如何ぢやと、兩眼をキヨロ〳〵と切上げ、屹となつて睨み付けた、若狭はハツと平伏して若狭「ハヽヽ、思はず口を滑らし、かくお咎めに與かつた

上は致方がございませぬ、このたび御父君と信之殿が、互ひに呉越となつて別れたまふと雖も、實際は左に在らず、御親子御相談の上のことで、これぞ眞田のお家の爲にござります、その理由如何となれば、若しも此度の合戰が關東方の勝利と相成つたときに、信之殿を德川へ屬け置くならば、御父君と御舍弟を庇蔭はれて、必ず家康殿へ頼み込み、其罪を免さるゝやうに取計はれます、また大阪方の勝利と相成つたときには、御父君と御舍弟が信之殿、信幸殿をば庇蔭はれこれを助けられまする、して見れば何れが勝利に相成つても、眞田の家は無事に相立つのでござります、因て御親子が御相談の上、故と双方へお別れになつたので、即ち眞田のお家に疵の附かぬ計略にござります　去りながら貫堀は本多平八郎忠勝殿のお娘御、七人の子は成すとも女に心を寛すな、若しも此事を口走つて、萬一其筋の口より本多殿へ知れ、それがまた德川へ知れたときには、この計略

も水の泡に相成るであらうと云ふので、信之殿よりは貴婦に何もお報せがないのでございます、因て貴婦は一途に御父君が悪いと思召され、かくの備準に及ばれたものでございませう、全く貴婦は敵方のお娘御なれば、何もお打明けあそばさぬ、其點が所謂七人の子は成すとも、女に心を寛すなと云ふお心懸でございますが、圖らず私が口を滑らし、御親子に對して申譯がござりませぬ　すみ「エーッ」と吃驚りいたしたおすみの方、思はず撞と尻居に倒れ、ホロリ〳〵と涙を流しましたが、遂に堪り兼ねたか、ワッとばかりに泣出しました、これを見た若狹は若狹「成程幸村殿は感心なものだ、怒つて泣く、此後は笑ふ、三人上戸ぢやアないか知ら」と沈と樣子を見て居りますと、おすみの方は袖を顔に押當てゝ　すみ「アヽお怨めしき我良人、假令妾が敵の娘にもせよ、一旦當家へ嫁入をいたした上からは、最早眞田信之の妻である、斯る御相談がありながら、何故妾に打明けて

下さらぬ、斯くまで疑はれて居るか、アヽ情なきことである」と良人信之をば恨みながら、漸うに顔を擡げ　すみ「別府只今の一言を承はれば、實に面目次第もない、妾も一旦本多の家を立出でゝ、當家へ嫁入をいたした上は、この眞田より大切な家はない、然るにそれほどの御相談があつたとは露知らず、斯る振舞をいたしたは、誠に申譯がない、宜しくお父上樣にお詫をいたして呉れヨ　若狹「ハヽッ　すみ「速に關を開きまする故、心置なくお通りを願ひますと云へヨ　若狹「ハヽッ、これにて安堵仕りました手前より宜しく申し上げ置きます　すみ「アヽ若狹、お父上樣に呉々も宜しく申して呉れヨ　若狹「畏まりました　すみ「使者大儀ぢや」と歸りは途方もない調子が違ひます、若狹は悦んで歸つて參り若狹「ヘイ只今歸りました　幸村「何うぢやおすみどのは、泣いたか若狹「いかにも到頭泣き出し、斯樣々々に申されました　幸村「ムヽさうであらう、サアお父上、參りませう、昌幸も驚いて　昌幸「忰

は豪い奴だ、成程われよりは優つた所があるわい」と思ひながらツ〳〵安中の關へ這入つて來ると、おすみの方は大地に兩手を突かんばかり、叮嚀に出迎ひを致しまして「すみ「これは〳〵お勇樣には只今御歸城にござりますか、何卒不禮の段はお免しを願ひます昌幸「ア、すみ、イヤもう勇ましいことおや、伜信之に其方のやうな心丈夫の嫁を持たせ、この昌幸も安堵いたしたさすがは本多平八郎殿の娘、信之は眞い妻を帶つて幸福おや、昌幸も悦ぶぞヨすみ「イヤ、面目次第もござりませぬ昌幸「併しすみよすみ「ハイ昌幸「承はれば昨年子が出來たさうぢやが、予が爲には初孫、見たい〳〵と思へども、亂世戰國の習、思ふやうに見ることも出來なかつた、只今手許に居るやうならば、早く對面をいたしたいすみ「承知仕つりました」と直ぐに乳母に吩附け伴れて來させましたのは、當年二歲になつた源次郎と云ふ者、おすみの方はこれを取るなりすみ「どうぞ抱いて遣つて下さりま

せ」とこれを昌幸の前へ差出しました、昌幸は源次郎を抱き上げて、暫らくの間顏を見て居りましたが、思はずホロリと涙を落し昌幸「ア、似たりや似たり花菖蒲、信之とは瓜を二ツに割つたようなものぢや、その名前さへ源次郎とは、これぞ信之の幼名である、コリヤ源次郎、其方とても成長をいたし眞田の家名を興し呉れよ、宜いか」と寶に氷は水より出でゝなは冷やかなるもの、孫は子より出でゝなは可愛いものでありまして、昌幸は婿しさうに源次郎の顏を見て居りました、これを眺めたおすみの方は、我子をば可愛がつて呉れるのですから、自分もこんな嬉しいことはない、其後は心も打解けまして、樣々に待遇を致しましたが、遂に昌幸はおすみの方に袂別を告げ、我同勢を從へまして、無事に安中口を打越し、上田へ立歸りましたが、これも幸村の計略でございます、此方は小山に居りまする本多平八郎が梶金兵衞を使者に出してしまふと、直ぐに眞田信之

を呼びまして平八「さて信之殿、信之「ハイ　平八「其許の父昌幸殿、弟幸村の御両名が上田へ帰られたのは、これ偏に大阪と心を通じ籠城でもいたさうと云ふ企てでもあらう、尤も昌幸殿の妻の妹は石田の妻なり、また幸村殿の妻も大阪方大谷刑部吉隆の親なれば、正しく大阪へ味方をいたされたものに相違ない、併し其許はかく云ふ関東方本多平八郎の婿でもあるから、御身には何の相談もなく引揚げられたが、其許はどう云ふ御心中でござる、婚姻の間柄、心置なく申されたい、信之はハッと頭を低げまして信之「御意にござります、このたび親弟の両名が大阪へ味方をいたすと承はり、私はたゞ〳〵驚き入りました、去りながら我等は関東へ忠義を盡さんが為に、一旦血判を仕りました上は、何ぞ心に迷がございませうや、親とは云へ、弟とは云へ、逆に挙破つてお目に懸けます、本多平八郎はこれを聴いて平八「其許の忠義は実より承知をいたして居る、さぞ上様においても、お悦

びでございませう、然らば早々お目通りをいたし、その心底を申し述べて下さるやう、是に於いて信之は伯父の信尹と相談をいたし、早々両名揃ひまして、家康殿のお目通りへ出ますと家康「信之、信尹両名「ハヽッ　家康「忠勝より承はつたが、其方等は親弟を捨てゝ、われに味方をいたし呉れるの心底、過分に存するぞ　両名「ハヽッ、我々両名は固より君公に忠義を盡さんと心得て居りまする者、いかでか大阪へ心を飜へしませうや、親とは云へ、兄とは云へ、石田の逆意に與いたす上からは、これ即ち天下に抵抗ふ曲者にござりまする、私共に先陣を仰せ附けられたく、一必ずこれを討取つて天下をば大平に治むるの心得にござります」と両名は思ひ切つて述べますと、これを聴かれた家康殿は家康「左様か、昌幸、幸村の両名とても、太閤の恩義を思ひ居るが故に、彼等も據所なく石田に與いたしたものであらう、決して憎いとは思はぬ、上田の小城に引籠ちんとするそ

の心底は義なり、勇なり、この家康は感ずる所ぢや、然るに汝等はこの家康を見捨てゝ、無二の心を相立て呉れるは、實に過分であるぞヨ」と兩人に短刀を一口づゝ下されました、このとき兩人は心の中に兩名「ア、此君はお情深いお方である、此仁の他に一命を棄てゝ御奉公をいたす君はないわい」と深く家康殿のお言葉に得心を致しました、尤も徳川家康といふ仁は、人をば歸服させるのが誠に巧妙でございました、そこで兩人は御禮を申し上げまして兩名「これより我々は沼田へ立歸り、若殿秀忠公を仕ります、なれば又早速同勢を以て、祝弟の歸途を取切らん心得にござりますれば、何卒お暇を願ひます家康「實に其方共の心得、悦ばしいぞヨ、然らば暇を取らせるでおらう」これから信之、信尹は同勢を從れ、一旦急いで沼田へ立歸り、昌幸幸村

の同勢を遮斷めやうと云ふ、父子の間柄でもありながら、斯くの如き始末に成ると云ふのは、これも戰國の習是非に及ばぬことでござります、併し斯う云ふ例がないとも云へません、明治十年西南の役に陸軍大將西鄕隆盛君が賊となつて、官軍に抵抗を致しました、其際官軍からは先達つて斃去せられた西鄕從道君このお方は兄弟の間柄でありながら、これを討たんとして九州へ出張いたされた、斯樣に兄弟が官軍と賊軍とに別れた例もあります、さて信之、信尹は沼田を指して道を急ぎ、恰も安中の此方まで來ると、向方に思ひも掛らぬ一揆の陣所がある、ハテ合點が行かぬと近づいてよく〳〵見れば、我家の定紋の附いた旗の手でありますから、さては我家來の者かと、暫時佇んで居りまする折柄、此手をば固めて居りましたおすみの方が、ハヲ〳〵と驅出でましてすみ「我夫樣、只今お歸りにござりますか、信之「オ、すみ、さては其方が同勢を以て出迎ひ呉れたか」と

ラリと馬より飛び降り、ズーと陣所へ這入りますと、おすみの方は夏夫信之の側へ進み寄り、

信之「コレ〳〵すみ、なぜ泣くのぢや、其方も本多平八郎の娘ではないか、この未熟者めがすみにござります、云ひながら、余りと云へばお情ない貴郎のお心のはどそばお怨み申します、お父上様と深い御相談があつてなされたことならば、何故妾に一筆お報らせ下さりませぬ、敵方の娘であると申して、何も知らざるにお置きあそばす、そのお心根のはどがお怨めしう存じます、一旦本多の家を出まして、當家へ嫁入を致しますれば、最早當家のすみにござります、夏人の身の上、真田の家の爲ならば、假令親とは云ひながら、次第に據れば敵とも仕ります、その妾の心をお疑ひあそばすは何事でござります」と又もやホロ〳〵と涙を流しました、信之は何が何だかサッパリ分らない、たゞ呆れ返り、おすみの方の顏を眺めて居りま

したが、併しこれもさすが本多の娘だから、まだこれだけ從容に云つて居るのです、これが下等社會の娘だつたら何うでせう亭主がボンヤリ歸つて來ると、突然胸部を引掴んで女房この宿六め、何だつて妾に物を隱しやアがるんだ、眞個に水臭い、畜生め、唆ひ附いて遣るぞ」なぞゝ云つて、なか〳〵一通りの騷動ではございません、さて掻き口說かれました信之は「コレ〳〵すみ、われには一切解らぬ、如何したものぢや、先づ一通り話をいたせ」このとき傍らより根津甚兵衞が出まして甚兵「左樣にござります、先刻昌幸樣幸村樣の同勢が此所へ見えられました信之「エーッ、さては早や參つたか甚兵「ハイ、斯樣々々の仕誰でございまして、それが爲に奥方がお歎きでございます信之「イヤこれはしたり、すみ、其方は幸村に嫁られたのぢや、これは幸村の計略に相違ない、元來幸村と云へる者は十三歲の時に辯舌を以て上杉の園を破つたくらねの者ぢやから、其方の固め

て居る所をば敢つて通るくらゐは何でもない、且つまた死人怪我人を出さず、穏便に通り過ぎやうと、其方をば敢つたのでもある、此方においては左様な相談も何もないぞヨ」と懇々申し聴かせますと、漸うおすみの方は合点が参りまして「さては謀られたか、残念の至りでござりまする」と口惜がつたが仕方がない、遂に信之は沼田城へ這入り、近藤次郎右衛門を呼びまして信之「さて次郎右衛門、次郎「ハイ」信之「其方はこれより上田城へ参り、父上幷に幸村の両名に面會の上、篤と異見をいたし、更めて心を飜へし、關東方に味方をいたさるゝやうにと申して参れ」と近藤次郎右衛門は早々準備をいたし、上田城へ乗り込んで参りまする、然るに昌幸はこれを逐返し、いよ〳〵日本開一上田籠城に取掛りまするといふお物語、一寸一息吐きます。

第三回

さても近藤次郎右衛門は家來の者を引率れまして、上田城を指して出て参り、追手へ掛つて見ますと、もう城内では穏かならぬ準備が出來て居りまする次郎「ヤア〳〵城内へ物申さん、われは沼田より参つたる近藤次郎右衛門と云ふ者である、大殿昌幸様にお目通りをいたしたいと呼はりますと、直ぐに番兵がこの趣きをば昌幸に申し入れますと、昌幸は暫らく考へまして「フヽヽ、左様か、斯様々々に計らへ」といふと、早々一人の家來が櫓に立ち現はれ「家來「ヤア〳〵近藤次郎右衛門、只今この所から綱をば下してやるから、供の者は一人も登ることは相成ぬ共方だけこれに縋つて登れい」と云ひながらスル〳〵と綱を下しました、近藤次郎右衛門は露いて次郎「これは大變だ、もういよ〳〵敵といふ了簡になつてお在でなさるか、宛然敵の使者の

やうでおるわい」と思つたが仕方がない、綱に縋つて登りました、尤もこの人はかう云ふ使者に撰ばれるくらゐだから、辯舌も爽快でござりますして一番眞田父子をば說き伏せてやらうといふの了簡、其儘案内に伴れズツと城内の一室へ通りますと、お茶も呉れなければ煙草盆も呉れない次郎「これは酷い扱ひ振だわい」とボヤリとしながら、馬鹿々々しいこともあるものだわ足が痺るくらゐに待たされた、そのうちにツ、ツといふ足音がしたかと思ふと、正面の唐紙がガラリと開き、立ち現はれたのは安房守昌幸、鎧下に陣太刀を横たへて、近藤次郎右衛門、

をハッタと睨付け「昌幸いかに次郎右衛門、汝がこの所へ參つたのは、定めて辯舌を以て我等父子をば、說伏せんといふ了簡であらう、もはや心を定め、關東へ抵抗をなす我々父子である、何ぞ今更德川に隨身をいたさうや、無益の言葉を發すには及ばぬ早々沼田へ立ち歸り、親兄弟を棄てゝまでも、關東へ味方をい

たすやうな信之、信尹は兄弟ではない、父子でもない、關東の先陣となつて攻め來れい、この父が手づから成敗をいたし、その頭に太刀を遣はすであらうと申せい、目通り叶はぬ、立ていヤア〳〵誰そあるか、次郎右衛門、次郎右衛門はアッと驚いて居る中に、ツラ〳〵と四五人ばかりの者が出て參り、寄つて集つて次郎右衛門の手を取り〇「出さつしやい」と、城の檜の所へ伴れて參り、以前の綱にブラ下げて、ズッと下してしまひました、次郎右衛門は初めから終ひまで何も云はない、アッと云つた切り、這々の体で沼田へ歸りました

が、かく昌幸が手强く云つたのは、深き了簡があつてのことです、此方は次郎右衛門が信之に向ひまして、右の次第を申述べますと、信之は思はず嘆息をいたし信之「ア、是非に及ばぬ、父君がさういふ了簡であるならば、われもまた決心をいたし、最早父とは云はさぬ、天下の爲に抵抗をいたさん」と到頭父子が

二ツに分れるやうなことになりました、ところが徳川家康公より急使を立てられまして、江戸中納言秀忠殿の許へ、早く軍勢を整へて關ヶ原へ出張いたさすべしといふ命令を下されました秀忠殿は固より期したることでありますから、早々同勢を催促されまする、これによつて江戸表へ馳せ參りました人々は本多佐渡守正信、大久保相摸守忠隣、森右近太夫忠政、毛利民部大輔高政、中山藤兵衛尉直純、佐竹右京大夫義宣、伊達陸奥守政宗、北條相摸守氏直、奥平美作守信昌、同九八郎家昌、小笠原隱岐守、土井大炊頭、鍋島信濃守、山内土佐守、本多隼人佐、松平信濃守、松平土佐守、樋口内蔵介、眞田伊豆守、同隱岐守、高山伯耆守を首めといたし、その勢十三万七千餘騎にござりまして、いよ〳〵この同勢が江戸表を發いたし、木曾街道をば關ヶ原へと進んで參ります、早くもこのことが信州上田へ聞ねますと、上田城内は僅か三千に足らぬ

小勢だから、何ぞ十三万七千の大軍をば防止められうかと、家來の面々は大きに案じて居ります、ところが昌幸は少しも勁せず、幸村を呼んで昌幸「其方は如何いたして關東の同勢十三万有余騎をば防ぐの了簡ぢや幸村「されば私は安中、松井田邊へ同勢を繰り出だし、其所に砦を造へまして、この邊から關東の同勢をば防ぎ始め、末は上田城で防ぎ戰ふ積りにござります昌幸「其方の了簡と我思ひとは符合いたした、然らば其方に万事の手配りを申付くるであらう幸村「承知を致しました」と幸村は忽ち軍配を取つて下知をいたし、まづ穴山小助、近藤無手之助、依田兵部、別府若狹の四名をば大將といたし、これに百五十人の同勢を添へ、安中の東西に陣取らせ、關東の同勢來らば打碎かんと、その左右には三門の大筒をば備へました、而してこの、手の後陣は海野六郎、穴山新兵衛、筧金六、増田九郎、同荒次郎、酢柳九藏の六名、これも同じく百五十人を從れて松井田に

砦を構へ、万一安中が破れたならば、此所でもう一度防止めやうと考へて居ります、なは輕井澤の驛の左右に砦を構へました此の手は由利鎌之助、木辻別右衛門、植田久左衛門の三名、これも同じく百五十人の同勢を以て固めました、さてまた上田城内には小宮山數馬、間部日向守、岩野左京等の二百有余名、これは追手を固めます、淺香鄉右衛門、松島藤馬、月方平馬等は三百有余名にて搦手を固めます、その上遊軍といたしては真田幸村が大將となり、根津甚八、三好新左衛門、同新兵衛等五百有余名を從れましたが、これは遊軍のことですから何所を固むといふ、所がない、彼方此方を廻るのであります、かくして三千に足らぬ小勢を以て八方へ手配りをいたし、關東の同勢遲しと待受けまするは、勇ましくも亦大膽なる擧動ですから、近國の大名は皆舌を捲いて驚いた、頃しも慶長五年七月二十五日、德川秀忠殿の從れられたる十三万の同勢は、中仙道を

深谷まで參り、斥候を出して動靜を探らせますと、其の斥候の者が立ち歸り、○「眞田昌幸が小勢をば彼方此方へ配り、一安中、松井田、輕井澤の諸所に砦を構へ、君の行手をば遮ぎらんといたして居りますといふ、注進でございます、秀忠殿はこれを聞き、早速眞田伊豆守信之を召されまして 秀忠「いかに信之「へッ 秀忠「其方の父弟兩名は、いよ〳〵わが行先をば遮ぎらんといたすにつき、われは其の同勢をば擊ち破つて通るべきなれども、左樣なことをいたして居れば日數を費し、關ケ原の合戰に遲れては相成らぬ、其方は父子兄弟の間柄であるから、今一應彼れの陣中へ參り、能く說得をいたし、道を開いて通すやうに取り計らへ、左あらば昌幸、幸村の兩名をば咎めはいたさぬぞよ 信之「へッ、その仰せは有難き仕合せにござります、去りながら父も弟も、拙者がいか程諫言を致しましても、到底聽入れるやうには思はれませぬ、最早異見立をいたすことは相成り兼

ねます、それよりは拙者に先陣を仰せ付け下さいますれば、上田方より如何樣な計略を施さうといたしても、速かに我同勢を以て撃ち破り、美事に道開きをいたしてお目に懸けます、何卒拙者の伯父隱岐守の兩名に先陣を仰せ付けを願ひます」と思ひ切つて申し述べました、すると暫らく信之の顏を眺められた秀忠殿は、兩眼に涙を泛べられまして秀忠「ア、父君の仰せに違はず、其方等の忠義は辱けない、去りながら其方等のやうな者をば苦しむるは憫然の至り、後陣へ廻つて呉れよ信之「ではございますが、どうか先陣へお廻しを願ひます秀忠「イヤ〳〵、兄弟父子の爭鬪はさせぬ、是非後陣へ廻り呉れい」と仰しやつて、到頭二人の者は後陣へ廻されました、これは秀忠殿の深き賢慮でござります、かくて先陣は森右近大夫忠政、二陣は大久保相摸守、三陣は松平土佐守へ仰せ付けになり、總勢十三万有余名がドッと鬨の聲を揚げ、今や安中口へ差掛つて參りましたが、これをば、僅かの小勢を以て防止めんとするは、宛然磐石に當る鳥の鷄卵にも同しく、一飛に飛ばされるやうな有樣にござります、まづ森右近大夫は五百名を從へ、鬨の聲を揚げながら、ドッと鉦太鼓をば打ち鳴して進みます、この折柄眞田の同勢は鎭まり返つて居りましたが、そのうちに遙か彼方の山の端に現はれたのは、穴山小助、その持つて居りまする赤き旗をば颯と打ち振りますと、立て並べて置きました三挺の大筒、これをば忽ちの間に筒口を拂ひ、森の同勢の眞中央を望み、ズドーンと撃ち込みました、その物音は數千の雷が頭上に落ち掛るばかり、これが爲に五百名の同勢は黑烟の中に撃ち碎かれ、四方八方へ飛び散りまする光景、生存つた森の同勢は一同膽を冷し、ワッと思はず崩れ渡りました、この有樣を眺めた二陣、三陣の同勢は、みな一足も前へ得進まない、ドン〳〵後方へ退るばかりにござります、秀忠殿は本陣に在つて、何事が起つたかと見られ

ますと、先手の同勢が黒烟の中に悲鳴を揚げて居る様子ですから、舌を捲いて驚き、暫時の間合戦を止めよと御意を下された呼ばれまして、只今真田の撃ち出したのは何ぢや、大変な音がいたしたが、一体何ういふ有様でもつたか」とお尋になると右近大夫忠政は　忠政「ハ、ッ、彼れの撃ち出だしたのは全く大筒でございまして、その音は宛然数千の雷のやうでございました、而して五六丁の間は黒烟となり、弾丸が火烟の中をば飛び廻りそれが為に即死をいたした者が二百名、怪我をいたした者は百有余名、其他物音に驚いて気絶をいたし、或は烟に噎て物の役に立たぬ者は数知れず、実に恐ろしいものでございます」これを聞かれた秀忠殿は呆れ返つて黙かれ　秀忠「伊豆を呼べい」と早々伊豆守信之を召されまして　秀忠「伊豆　信之「ハ、ッ　秀忠「其方の父昌幸が今日用ゐたるものは大筒に相違ない、去りながら未だ心

得ざる不思議の大筒、あれは如何なるものぢや　信之「左様にございます、手前の舅父に当りまする幸隆が工夫に工夫を凝し、漸う造りました大筒が三門ございます、その大筒は至極難戦の折柄でなければ使ふことはならぬと日頃から申して居りましたが、而して父昌幸はその撃ち方と造り方をば存じて居りましたが、拙者には一向教へて呉れませぬ、併し聞く所に拠りますれば、この大筒は一度撃ち出だしたときには、筒口が裂れてしまひ、二度と物の役に相立ちませぬ、なはまた三門しかございませぬゆゑ、三門を撃ち出してしまつたならば、最早何も飛道具はないのでございますから、此上は御安堵を願ひます」と聞いて秀忠殿は吻と一息を吐かれ　秀忠「左様か、予もそれにて聊か安堵いたした、然らば明日更めて攻め立てん、左様心得い」と云ふのでその日は最早合戦を休み、翌日に相成りますと、又もや森右近太夫をば先手といたし、ドッとばかりに乗り出して参りました

が、もう昨日の大筒で度膽を抜かれたから、森の同勢は皆ひや〳〵して居ります　○「オイ、昨日の物音は何うだ、耳の中が破れちまつて、加之に腸が轉動が返つたせ　△「さうだ〳〵、もうあんな大筒はないといふから、今日は氣を勵まして進んで居るものゝ、万一またあんなものを撃ち出されては大騒動だ　○「ふゝ能く氣を注けて進まないと不可ないよ」と威勢よく進む者は一人もない、今日は何うであらうかと思ひながら、皆一足づゝ進んで參り、偶爾と向ふを見ると、昨日と同じく山の端にドンと三門の大筒が据つてある、これを見た森の同勢　○「ヤア大筒があるぞ〳〵」といふと皆ドン〳〵逃げ去りました、この体を御覽になつた秀忠殿は、早々遠眼鏡を以て暫時彼方を望て居られましたが　秀忠「成程、大筒が三門あるわい、伊豆を呼べい」直ぐに伊豆守が其所へ參りますと　秀忠「其方は昨日斯樣々々に申したが、今日も矢張り大筒があるではないか　信之「ハヽッ、一寸遠眼

鏡をば拜借致します」と伊豆守信之は遠眼鏡を取り、暫らく向ふを眺めて居りましたが　信之「手前の弟幸村は實に計略の多い奴でございますから、これは材木を伐り倒して大筒のやうに見せ懸けたものに相違ございません、イデ擱者が先陣を仕つります……御一同、我等に續いでお進み下さい　秀忠「左樣か、然らば其方が先陣をいたして呉れよ　信之「承知を致しました」と忽ち後陣の伊豆守と隱岐守の兩名が先陣と相成りまして　兩名「ヤア〳〵方々、決してあの大筒は撃ち出だせるものではない、子供を欺むくやうなものでござるから、もう御心配を召さるな、この伊豆守が先陣を仕つり、美事に撃ち碎いて御覽に入れん、サア續いて來られよ」と云ひながら、ドッとばかりに乘り出だした、これを見た森、大久保の同勢は　○「イヤ撃ち出すことの出來ぬ大筒ならば怖くはない、併し万一撃ち出だしたら大變だヤア〳〵徐々行かう」と怖々ながら後方から續いて參りましたが、これ

は全く伊豆守の看破いた通り、幸村が材木をば伐り倒し、もう一度敵をば驚かしてやらうと、案のごとく一度は欺されたので御ざいます、然るにその同ら、ホンの笑ひ草にやつた仕事だから勢が入り代り、現在の兄弟たる伊豆守、伸父たる隠岐守の両手が金鼓を出して乗り込んで来た、これを見たものだから、穴山小助を首め一同の輩は、驚破こそ悟れを見たものだから、穴山小助を首め一同の輩は、驚破こそ悟い信之殿かな、イデ我手並のはやを見せて呉れんと、楯の板の間から鉄砲と矢をば隙間なく撃ち出だしまするが、沼田の同勢は事ともいたさず、関の声を揚げて進んで参りました、この折柄穴山小助の陣中に鉄砲の名人依田兵部と云ふ者がある、この人は鉄砲を以て敵の大将らしき者を狙ひ、片ッ端から八人といふ者をば撃ち倒しました、これが為に勢よく進んで参りました沼田方の同勢も、思はず退色に相成りまする、このとき信之の耶兵に驚尾次郎助といふ者がある、この人は信之の家来の中で

第一の剛勇でございまして、三尺に餘る陣太刀を振り冠り次郎ヤア〳〵一同の輩、何故其方等は敵に敗れたか、何條なにはのことやあらん、われに續いて参れい」と雨のごとくに射掛けらるる矢をば、彼方へ拂ひ此方へ拂ひ、ドン〳〵進んで参りまする、これを見た一同の輩は「〇〇ソレ驚尾に遅れを取るな」と中根但見、黒瀬孫七郎、中山九郎次なぞゝいふ剛の者が、續いて砦へ攻め寄りましたが、第一驚尾次郎助の働作は實に抗り難きものでございますから、これが為に真田方は八方へ斬り散らされまする、これを跳めた依田兵部「心憎き次郎助かな、イデこの世の暇を取らして呉れん」と沈と狙ひを定めてドーンと切つて放した一發は、過なたず次郎助の横腹を撃ち抜いた、フッと云つた次郎助は馬上に堪らず、頭轉倒と馬から轉がり落ちまする、ところへ依田兵部の郎黨矢八郎といふ者が駈け寄りまして、突然次郎助を取つて押へ、その首を掻斬らうとすると

次郎助は横腹へ鐵砲を撃ち抜かれながら、矢八郎の襟頭を掴んで引据ゑやうとした、こは往生際の悪い人かなと、矢八郎は暫らくの間上になり下になり、互ひに引ッ組んで居りましたが、大きな穴が明いたといふのに、横腹へ鐵砲玉を撃ち込まれて、まだ負けぬ氣になつて組討をするとは、昔の人は強情でございます、尤も腹に穴が明いたくらゐはそんなに辛いこともないと見えます、忠臣藏の早野勘平といふ人は、腹を斬つてから長い間物語をやらかしますが、あれは芝居狂言だから見て居られます、併し強情我慢の次郎助も、何分急所の深傷のことでありますから、暫らくの間組合ひましたが、到頭矢八郎の爲に組敷かれた、そこで矢八郎は短刀を引抜いて、アスーリと首の所へ突ッ込んだときに、汝のやうな下郎に首を擧げられるのは殘念と次郎助はウンと矢八郎を睨付けた、このとき矢八郎は思はず知ラ〳〵と身を顫はしながら、漸う次郎助の首を擧げたといふ、

然るにその首は突然生けるがごとく、雨眼爛々といたし、火焔を吐かんばかりの有樣にござりますから、矢八郎はその首を見て神經を起し、三日ばかり罹病つて死んだと申しますが、實に英雄の最期の際の顏貌は凄いものに違ひございません、さて信之の同勢は頼みに思つた慈尾次郎助が討死をいたしたから、今は致方がない、ドッと崩れ立つて參りました、この折柄大久保相摸守、松平土佐守、森右近大夫の同勢が〇「ソレ最早大筒は大丈夫だ、乘り込めッ」とドッと勢鋭どく乘り込んで參ります る、併し眞田方は小勢、敵は多勢だから、必死になつて防止めて居りましたが、遂に關東方の爲に斬り崩され、穴山小助、依田田兵部の同勢は崩れ立たんとする、その途端に遙か彼方より一圍の同勢が現はれまして、金皷亂拍子に打ち鳴し、穴山、依田を助けんと、ドッとばかりに乘り出だしたのは、これぞ近藤無手之助、齋藤佐吉郎の同勢でありまして、關東方いかに大軍た

りと雖も、何條何程のことやあらんと、森、大久保、松平の同勢の中へ斬り入りました、然るに江戸中納言秀忠殿は中根ロと云ふ所に本陣を取り、まづ味方の合戦は勝利に向いて居りますから、ヤレ悦ばしやと頻りに遠眼鏡を以てその合戦振をば御覧に相成つて居りました折柄、思ひも寄らず、御自分の背後の山手の方に當り、ドッと揚つた関の聲、秀忠殿を首め本陣の同勢は何事ならんと、ハッと回首つて見ますれば、こはいかに何時の間に背後へ廻りましたか、六文錢の旗の手を押樹てながら、高崎、板鼻邊から廻つて来たものと見ねます、これぞ即ち眞田左衛門佐幸村でございまして、羽州龜田の領主三好新左衛門入道清海、同新兵衛入道為三、小宮山數馬、種ケ島丹後等五百有余名の同勢を従へ、中納言秀忠殿の本陣の後方からドッと喚き叫んで乗り込んだのでありまする、驚破こそ敵が背後へ廻つたと本陣の同勢は勇を奮つて防ぎ戰ひましたが、何ぞ眞田幸村の軍

配に叫びまするや、本陣は滅茶々々に打ち崩され、今は維持へることも出来ないやうになつたから、秀忠殿も何所へか落延びんとあそばして居らせられまする折柄、眞田勢の中より七尺有余もあらうといふ大兵肥滿の大入道、筋鐵の入つたる樫の棒を片手に引ッ提げ、大音を揚げまして清海「われは三好新左衛門入道清海なり、江戸中納言殿に見參いたさん」と呼はりながら秀忠殿の馬前を望んで參りまする、即ち中納言秀忠殿の御難戰、これなる三好清海が秀忠殿の背後をば逐ッ駈けまするといふ、引續きまして中納言殿の味内にて鬼神と呼ばれたる三河國の住人鎭目市左衛門宗茂が忠義の討死を遂げまするの順序でございます。

第四席

目に餘る關東の大寃も、小勢とは云ひながら眞田の爲に、本陣

の横間から撃ち込まれては堪らない、一同七裂八砕になつて敗走致しました、江戸中納言秀忠殿も進退維に谷まり、馬の頭を取り直し、今や引揚げんとあそばしまする途端に清海「ヤア〳〵三好清海此所に在り、中納言殿に見参いたさん、わが一棒を喰い候へ」と筋鐵の入つたる樫の棒をば、他人には重けれどもわれには学殻に等しいと云はぬばかりの面貌にて、リウ〳〵と振り廻し、馬をば躍らして乗り込んで参りました、秀忠殿はこれを御覧に相成り、スハ大変、斯様な者に向つては到底叶はぬと思はれたか、ハイヨーと馬足を早めて引揚げんと致されました これを眺めた清海は 清海「ヤア〳〵秀忠殿、何所へ逃げらるゝか返せい、戻せい」と云ひながら、ドッばかりに逐つ駈ける、これを見た奥平信昌の家来三十五六名の輩が、ドッと清海の前を取り切りましたが、清海は事ともいたさず、右左にこれを打ち飛ばし、又もやこれを撃破り、馬を以て蹴飛ばし、なはも秀忠

殿の後を追はんとする、このとき旗本の中で、鬼武と云はれた三河國の住人鎮目市左衛門宗茂と云ふ、當年七十八歳、力量他くまで聞く、而も陣太刀の達人でございまして、七十八歳になつて戰場へ出で、壯者をばまだ腰も曲らず、眼光人を射るばかり、何時まで經つても異らぬに依つて、鬼市左と云ふ綽名を附けられて居ります、その市左衛門が遙にこれを見ると、懲破君公の大事と思ひましたか、二後の方より聲を擧げ、市左「ヤア〳〵其所へ參る三好とやら、我は徳川の旗本にて鬼と綽名を博つたる鎮目市左衛門宗茂である見參いたさん、懲に後を見せるは卑怯であらう、返せ〳〵」と呼はりながら、ドッとばかりに乘り込んで參りました、清海はこれを見て 清海「エッ面倒なり、邪魔いたすな」と忽ち件の棒を取り直し、腦骨微塵になれと打ち下しました、市左衛門は心得たりと云ひながら、ヒラリと馬を乘り違ひ、三尺二寸の野太刀を

振り冠つて斬り込んで參り、互ひに暫らくの間捧と陣太刀を持つて、一上一下虚々實々火花を散らして撃闘ひましたが、そのうちに清海の苛つて撃ち込んで參りました棒、市左衛門はハッと身を開き、ヤッと云つて斬り下した一刀は、棒の真中央をばザクーッと斬つて落しました、筋鉄の入つた棒をば截ると云ふのは、實に嘘のやうな話ですが、決してさうではございません、腕前さへ出來れば鐵をも截るのは瓜のやうなものです、越後の諺信は川中島の合戦において、大久保内膳の大筒を截つて落しましたが、この鐵が截れぬやうでは戦場で働けない、兜の天辺八幡座から撃破ると云ふことがあるが、固より八幡座は鉄でございます、これをザクと截るのだから、實に勢ひで截れるのです、されば筋鐵の入つた樫の棒をば截り落された清海は、これは仕損つたと思つたから、一ガラリと半分の棒を投げ捨てゝイザヤ組まんと大手を開げた、市左衛門は望む所であると、互ひに馬に跨つてムンズと引ッ組み、暫らくの間揉み合つて居りましたが、互ひに上になり下になり、なほ暫らく揉み合つて居りましたが、そのうちに老人ながら市左衛門の力や優りけん、清海をば膝の下に組み敷いた、こは残念と跳ね返さうとしたが、返させない、市左衛門はキラリと小刀を抜いて振り上げ、清海の首を掻き斬らんとする、清海はその振り上げた市左衛門の肱の所をば、下からグッと押へ、一生懸命に止めて居ます、市左衛門は左の手で清海の胸の邊を押へ、右の手で小刀を振り上げたが、その手をば止められて居るから 市左「放せ〳〵と呼はりまする、清海は「何を云やァがる、お前の方では、放したら都合が宜からうが、此方ぢやア放したら首が飛ぶわい」

となか〳〵放す氣遣ひがございません、市左衛門も一生懸命に押へて居りますから、いやや清海も危く相見えました所へ、こ

の様子を見るなり疾風のごとくに驅けて參りましたのは、これぞ清海の弟新兵衛爲三でございまして、市左衛門の後から鎧の袖を掴まへ、ウヽーンと力を出して引きますと、市左衛門も引かれては堪りません、アッと云ふと思はず手が緩んだ、ところを下からドッと跳ね返す、市左衛門はこは仕損つたと起き上らんとする、このとき清海は陣太刀を拔く手も見せず、市左衛門の肩先から颯と斬り込んだから市左「アーッ」と叫びますと爲三もまた陣太刀を拔いて斬り突けた、兩人に斬られた市左衛門到頭七十八歳を一期といたし、茲に戰場の餘と消えましたのは實に比類なき動作でござります、吻と一息吐いた兄弟爲三「お兄上危いことでござつた、怖しい強い奴もあればあるものでござる年を老つてこんなに強ければ、若い時分にはどんなに強かつたかも知れない、まづ怪我がなくつて結構です清海「だまれッ、爲三、何故貴様は横間から餘計な眞似をいたした爲三「ハイ清海「要

らぬ手出しをするな爲三「御串戲を仰しやるな、貴方が危いと思つて助けたのです清海「何も危いことはない爲三「だつて貴方は組み敷かれて居られたのではございませぬか清海「イヤあれは組み敷かれたのではない、七十歳にもなつた爺だから、わざと弄る積りで、此方の腹の上に乘せて遣つたんだ爲三「負惜みの強いことを云ひなさるな」と爲三も笑ひながら爲三「お兄上、到頭江戸中納言秀忠は逃がしましたナ清海「ふゝこの爺の爲に取逃がした殘念ながら致方がない、マア引揚げやう」と兩人は市左衛門の首を提げて引ッ返しまする、何しろ中納言秀忠殿が斯う云ふ有様だから、關東方は滅茶々々に破れました、上田方は一同勝鬨を擧げて、ドッとおの〳〵持場の砦へ引揚げました、此方は漸う山手の方へお引揚げになつた秀忠殿は、おひ〳〵味方の同勢が集まつて參りましたから、ヤレ嬉しやと吻と息を吐き、一同の同勢をば纏めてしまひ、怖しい奴は眞田親子である、どんな

ことをするかも知れないと、たゞ身顔ひをして居られましたが、まづ今晩は用心嚴重に陣を張つて居れよと云ふ命令でございます、これに依つて關東方はみな身體も疲れて居りますから、嚴重に陣を張り、一同休んで居りまする、その中に大久保相摸守忠隣と云ふ大將が家來の佐原源右衛門、望月多宮と云ふ兩人を呼んだ、この兩人は家老でございまして　源右「御主人、何の御用でございます　忠隣「さて左原、望月　兩人「ハイ　忠隣「斯く上田の小勢の爲に我々の大軍が惱まさるゝとは殘念の至り、われの考では眞田の計略が多いから、迂濶り手は出せぬと云ふ腹に畏悸があるから、却つて先方の謀計の罠に陷るのだ　源右「左樣でございませう　忠隣「先方が計略のある奴だから、此方から一番計略を蒐けて參つたならば、よもや討てぬことはあるまい、今晩拔驅をいたし、彼れの砦へ夜討を仕掛けては如何ぢやらう　源右「成程、それは好いお考でございます、昔平山の武者所熊谷が拔驅をいた

した例もございますから、今宵我々は一番拔驅を致しませう」と云ふので、これから他の陣へは知らさず、相摸守忠隣は右の佐原、望月を首め、その同勢五百名ばかりを從へ、馬には枚を銜ませ、小旗を寢し、足音をさせないやうに致し、今や安中の砦の此方まで參り、まづ斥候を出して動靜を探らせますと、上田勢は今日の合戰に思ふ存分に勝つたものですから、身體も疲れ、ヤレ〳〵と思つたか、みな轉々と睡て居るのは、よもや德川から夜討を仕掛けに來るとは夢にも知らぬものと思はれます此所ぞ攻め所であると云ふので、今まで靜にいたして居りました大久保の同勢が、忽ち哄と鬨の聲を擧げ、無二無三に攻め込んで參りました、これに依つて穴山小助、依田兵部などゝ云ふ當手の大將が小助「驚破敵の夜討である、儕輩、油斷をするな」と呼はつたが、何分身體の疲れて居る上田勢、みな寢惚眼を擦つて起き上る、ところへドン〳〵鐵砲を擧ち込まれたから、な

かく遮断むるところではない、そのまゝドン〳〵逃げ出すばかり、大將穴山、依田、近藤、齋藤なぞは、心は頗る猛に逸つて居りますが、部下の兵士が逃げるものだから、自分共も仕方なく松井田の砦を指して逃げを參りました、大久保相摸守の同勢は安中の砦の逆茂木を打ち破り、充分に之れを攻め落してしまつたから、サア相摸守は大天狗でございまして、大勢合戰に敗けて居る、その中に我ばかりは斯の通り、僅か一夜の間に敵の砦をば陷いれたと大きに悦びながら、直ぐにこのことをば本陣へ注進を致しますと、秀忠殿はこれを聞かれ、忠隣の働作は天晴でもあると、當座の褒美といたし、金作りの太刀一口を下し置かれたから、ソレこの勇氣を拔かず、松井田を落してしまへと云ふので、忽ち大久保忠隣が先陣と相成り、松平土佐守、森右近大夫、鳥島信濃守、眞田伊豆守、同隱岐守の五萬有餘の同勢が、大波の岩に衝つて返すがごとき勢ひを以ち、ドッとばかり

に松井田を指して攻め蒐りました、このとき松井田の砦の大將增田九郎、同荒次郎、春田彌十郎、海野六郎、穴山新兵衛、酢柳九藏等は、驚破敵が擊ち掛つて參つたと、安中から逃げて參りました敗將穴山、近藤、依田等と一緒になり、關東勢を望んでドッと鐵砲を擊ち出し、力を盡して防戰に掛りましたが、何分關東の同勢は大軍の上に勝に乘じて乘り込んで參りましたその凄じい勢ひと云ふものは到底當り難ない、併し上田勢も必死になり、弓鐵砲を放して遮斷めて居りますが、關東勢は入り代り立ち代り、先手の大久保の同勢が疲れたかと思ふと、鍋島信濃守の同勢と云ふやうに、交る〳〵新手が向つて參ります、此方は敵手は異れど自分は一手、しかし穴山小助は安中で破られて居りますからその殘念遁る方なく、自から槍を取つて眞先に立出で、當るを幸ひに突き捲つたから、その槍先に罹つて果てました關東の名

ある勇士ばかりが十三名、斯ばかりの働作をいたし、おの〳〵必死の勇を揮つて戰ひましたが、如何にしても多勢に無勢だから仕方がない、到頭松井田も切り崩され、ドン〳〵敗走致しまする、關東の同勢は安中と松井田の二ッの砦を落してしまひヤレ〳〵と思つた、これが恰ど正午頃でございましたから、此所で兵粮を喫ひ、この勢ひを以て上田城を乘ッ取つてしまはうとサアみな兵粮の準備に掛りました、すると雜兵が不圖首を傾けて　○「オイ、お前は先刻から妙な音を聞きはしないか　△「何だ　○「何だか知らないが、ゴウ〳〵と云ふ音がするやうだぜ　△「サアお前がさう云ふと、拙者もさう思ふんだ、何所で音がするのだらう　○「在下の中に音がして居るやうだヨ　△「地上で我々が合戰をして居るものだから、鼹鼠が負けぬ氣になり、喧嘩をして居るのかも知れない　○「馬鹿云ふな、何しろ訝しいぢやないか」と云つて居りまする途端に、これぞ幸村の計略でござり

まして、必死に遮斷めて敗軍をしたやうに見せ掛け、關東の同勢をば安中と松井田の間へ進ませながら、此所へ一面に地雷火を埋せたものでございます、何しろ正午の兵粮ですから、ドン〳〵飯を焚く、その火が飜りましたので、たゞさへ火氣があつたらば、破裂しやうとして居る地雷火だから、何條以て堪りませうや、ズドーンと大地を破つて打ち揚げた、その物音と云ふものは百千の迅雷が天に向つて吼ゆるがごとく、大地を裂き火焔を吐き、黑烟を吹き上げます、その光景、凄じなんど云ふばかりもございません、關東の同勢は肝を潰し　○「地雷火だ〳〵」と云ふなり、その身體が黑爛れ、或は粉奈微塵になつて死する者數知れず、實にどうも阿鼻焦熱地獄の責苦も斯くやあらんと思はるゝばかり、生存つた同勢は、みな狼狽騷ぐばかりでございます、この折柄遙向方の森蔭にヒラ〳〵と見えたる一流、これぞ白地に黑く六文錢を染め出したる旗の手でございましてこ

れをば颯と飜し、何時の間に此所へ廻りましたか、眞田左衛門佐幸村が由利鎌之助、淺香郷右衛門などを從へまして、今や右往左往に騷ぎ居りまする關東勢の中へドッとばかりに攻め掛つたのであります、驚破敵が乘り込んだと、誰一人もこれを遮斷めやうとする者がない、一同周章狼狽くばかりに中には逃げやうとして味方を踏み殺す奴もある、その混雜は目も當てられない、眞田の同勢は思ふ存分に關東勢を突き倒し、撃ち倒し、ドン〳〵秀忠殿の本陣を指して乘り込んで參ります、このとき幸村は德川中納言秀忠殿は何所に在りやと、彼方此方を見廻しますと、流石の秀忠殿も餘りの狀態に茫然としてお在であそばしまする、幸村はこれを見るなり幸村「ヤア〳〵其所に在るは德川中納言と見たるは僻目か、眞田左衛門佐幸村此所に控へたり見參」と呼はりながら槍を捻り、ドッと乘り込みました秀忠「さては幸村であるか」と秀忠殿は馬の頭を返し、ドン〳〵逃げ出さ

れまする、幸村は逃がしは遣らじと、その後を追ッ駈けまするうちに、關東方の勇士中村式部太夫、稻垣攝津守、跡見藤八二階堂牛松などゝ云ふ千有餘名の同勢が幸村の行先を遮つた、これを見た幸村は幸村「ヤア汝等邪魔だてをいたすな」と槍を以て擲き倒し、打ち飛ばし、何所までも秀忠殿の後を逐はんとする此方は中納言秀忠殿が馬に鞭を打ち、ドン〳〵お逃げに相成りましたが、先刻から一生懸命に逃げ、もう目が眩みさうだから吻と一息を吐き、馬足を止めて見ると、どうやらもう敵も來ない樣子、咽喉が渴いて堪りませんから、傍を見ると流れがあるこれ幸ひと馬より下り、水をば手に掬つてグックと召飲り、暫らく身體を休めてお在でになる、ところへ騰々と馬足の音が近づいて來るから、ヤレ嬉しや、味方が參つて呉れたかと、偶爾と振り返つて見ればこは如何に、眞田幸村が槍を取つて乘り込んで來るのでありますから、ガタ〳〵顫へながら立ち上つた秀

忠殿、再び馬に乗らんとする暇もなく、そのまゝ足に任して逃げられまする、幸村は後より聲を掛け「幸村ヤア〳〵中納言殿中納言殿、返せ〳〵」と云ひながらその後姿々々、最早逃れぬ所である、返せ〳〵」と云ひながらその後をば追ッ驅けまするとも、一生懸命に逃げらるゝばかり、この折柄中納言殿は何所に在らるゝかと、松平土佐守、鍋島信濃守の同勢が八方へ手分をして捜し居りましたが、●今しも松平土佐守の同勢が秀忠殿のお姿を見たものですから、ドッと横間から驅けて參り、ハヲ〳〵と四五十名が秀忠殿の四邊を取捲いた、これを見た幸村は幸村「エヲ、又しても邪魔する奴が出るか」と猛虎の荒れたやうな勢ひを以て乘り込みました、そのうちに鍋島信濃守の同勢も集まつて參り、彼是二三千人と相成つたから、幸村も最早斯うなつては討つことが出來ないと、そのまゝドッと引揚げました、このとき秀忠殿は物と息を漏し、虎の腮を逃れたやうな思をなし、取敢ず高崎迄

で引揚げられました、これに依つて上田勢は思ふ存分に勝を占め、安中、松井田の砦を取り返し、勝閧を作つて退きまする途に秀忠殿は高崎に本陣を据ゑられますと、おひ〳〵味方の同勢が集まつて參りましたから、一同の勇士を呼んで御評定に相成りました、關東の大名はみな顔の色がない、秀忠殿は上席に若かれまして、秀忠「皆の者、よく承はれ、お父上は關ヶ原に在つて石田、小西の大軍に抗り、只今御合戰の眞最中であるから、我も早々く乘り込まなければならぬ、然るに新る小勢の爲に遮斷められ、何時までも鳥兎を費して居るのは殘念の至り、其方共は今一層奮ひ勵み呉れ、何とかいたして此所をば擊破つて通れるやうにいたせ、如何ぢやんな者を見ると、これぞ本多佐渡守正信でございまして政信「我君、實に恐しい奴は眞田親子にござります、この上は何時迄で攻めましても、容易く擊破れるやうには思へませぬ秀忠「〇「恐れながら申上げます」と前へ進

政信「かく烏兎を費して居りまして、關ヶ原の合戰の間に合はなかつたときには、それこそ殘念でございますから、これより路を變へさせたまひ、東海道から廻つてお進みあそばして、如何でございます」これを聽かれた秀忠殿は赫と顏の色を變へられまして秀忠「だまれッ、正信、この秀忠は十三萬の同勢を從れて仲仙道を參りながら、僅か三千に足らぬ小勢の爲に遮斷められ意氣地なくも街道を變へたとあれば、これぞ末代までの恥辱である、この秀忠は死すとも斯樣なことはいたさぬ、無證者奴が無益の語を吐くなかれ」と礑とばかりに睨め附けられた、佐渡守正信は赤面をいたし、何にも云はず俯向きまする、この折柄へ森右近太夫が席を進みまして右近「恐れながら申上げます　秀忠「何ぢや　右近「然らば安中、松井田をばお進みに相成るよりは、これより路を間道に取り、彼の碓氷峠を越して、上田の城下へ直接に乘り込まれては如何でございます、安中、松井田なぞにて時を

費し、詰らぬ合戰をいたすよりは、間道を越して上田へ乘り込み、眞田の本陣を討ち落し、その上關ヶ原へ罷り越すが宜うございませう　秀忠「ム、右近大夫の云ふ點は尤もである、然らば安中、松井田を出し拔いて、間道から上田へ乘り込まう、早々準備に及べい　右近「ハッ」と應へて忽らの間に同勢を揃へ、上田への間道碓氷峠を望んで乘り出しましたが、この路ばかりは、よもや眞田が手配りをいたして居やうとは思ひません、いま碓氷峠へ掛つて參り、先陣に進んだ大久保忠隣が、偶爾と先方を見ますると、是は如何に何時の間に此所へも手配りをいたしたか、六文錢の旗の手が颯と飜へて、居りますから　忠隣「驚破大變、眞田は拔目のない奴だ、此所へも手を廻して居つたか」と忠隣は周らく睨み附けて居りました、此方は眞田幸村が斯ることもあらうと思つたか、早くも小宮山數馬、淺香鄕右衞門、松崎藤兵衞月形兵馬などの三百餘名をば此所へ陣取らして置きました、こ

のとき關東方にては大久保相摸守忠隣が傍を振り返り忠隣「ヤア〳〵一同の者、たしかに承はれ、敵はこの所にも手配りをいたして居るが、今更何條後へ退かれうや、この澁峠をば塞所と心得た忠隣である、一寸も後へ退くな、遂に此所を撃破つて通れい、進めい〳〵」と自から眞先に立つて來配を執り、ドン〳〵下知を致しましたが、忠隣は最早生きて居ないと、覺悟をいたしたものでございますから、その何うも勢ひの鋭きことは云はん方がない、遙此方よりこの体を御覽になつた秀忠殿は「秀忠、誰そある、忠隣の同勢が鋭く押掛けて參るのは、察するに最早死ぬる氣と相見えたり、可惜勇士を殺しては相成らぬ、ソレ忠隣を助けヨ、進めッ」と仰しやると小笠原信濃守、毛利民部少輔伊達陸奥守等の同勢が、ドン〳〵後から進んで參ります、これが即ち澁峠の合戰、これより幸村が計略を以て、關東の同勢をば上田の本城へ誘き寄せ置き、又もや之れを一時に擊ち碎きませうと云ふ、幸村妙計の條、一寸御免を蒙ります。

第五席

爰に眞田の同勢は必死の勇を揮ひ、激しく乘り込んで參ります關東勢をば一生懸命に防止めましたのは、實になか〳〵の働作でございます、ところが最早日も西山に傾き、足許が暗くなつて參りましたから、關東方は本陣より下知を下し、何しろ計略の多い眞田であるから、無理な合戰をいたし、また味方の同勢が敗軍を引出すやうなことがあつてはならぬ、暫らく合戰を止めよといふので、引鉦を鳴し、一旦同勢を纏めましたが、この澁峠の合戰はこれで勿別れになりました、僅か三百の同勢を以て、かゝる大軍と物別れの合戰をしたといふのは、實に天晴なものでございます、併し双方共合戰を休み、明朝の合戰とい

ふ心得で居りますと、先陣をいたして居る大久保相摸守の陣中へ、ヒユーと陰を生ずると、一本の矢が飛んで参りまして、旗竿にヒシーリと打ち當つた、雜兵は驚きながら、早々これを拾つて見ると、矢に手紙が附いて居りますから、直樣これを忠隣の許へ持つて参りました、相摸守忠隣は何事ならんと開いて見ると

一密書を以て申入れ候、我々は眞田が催促に隨ひ止む事を得ず此所を固め居り候へ共、元來眞田は我意を振ひ諸卒を憐ますして或は手討なぞの振舞有之候、依つて我々は眞田に反きて關東方に降參せんことを望み候へども恐くは疑を生じて赦し給ふまじ、願くは疑念を散じ宜しく御推擧下さるべし、御兎あるに於いては船に火を掛け其紛に打時で御味方に參る可く候、以上

慶長五年八月十八日　小宮山數馬
淺香鄕右衛門

とありますから、一通り讀んでしまひ、暫時の間首を捻つて居りましたが忠隣「ハテ合點が行かぬ、眞田の家來の小宮山數馬、淺香鄕右衛門といふ奴はなか〳〵の勇士である、既に今日の合戰においても、彼等は餘程の勇戰をいたして居る、嘸偽の多い眞田であるから、何ういふ存意があるのかも知れない、何しろこれは本陣へ持參をいたさう」と眞偽忠隣は本陣へ參り、中納言秀忠殿へこれを差出しました、秀忠殿は「コリヤ忠隣、油斷は出來ぬぞ、計略の多い眞田父子のことであるから、また如何樣な計略を以て參るかも知れぬ、早々伊豆を呼べい」聽て眞田伊豆守がお目通りへ出ますと秀忠「伊豆、斯樣な矢文が參つたが、其方は何と心得る伊豆「ハイ」と伊豆守も暫らく考へまして「伊豆、左樣でございます、淺香鄕右衛門

と云へる者は以前佐々内蔵之助の家來でございまして、眞田へ主取りをいたしてから、未だ間がない新參者にござります、また小宮山數馬と云へる者は、以前武田の家來でございましてこれとても眞田とは餘り深しい間柄とは思はれませぬ　秀忠「左樣か、伊豆」これは實際の降參であるかのやうに思はれまする、なれども萬事嘘偽の多き幸村なれば、私は何共返答が出來兼ねます去りながらこの手紙には松崎藤兵衛と云へる者を以て彼此申し入れると書いてございますから、其奴が參つたならば、筈と御吟味を願ひたう存じます　秀忠「然らば左樣にいたさう」と云つて居りまする所へ、信之の家來が參りまして家來「申し上げます信之樣何ぢや　家來「只今御陣所の前をば怪げなる奴が一人、彼方此方と徘徊いたして居りますから、直樣取り押へ、繩を打ちまして置りますが、如何取り計らひませう　信之「左樣か」と信之は秀忠

殿の御前を退り、わが陣中へ歸つて見ると、いかにも一人の曲者が網つてある　信之「コリヤ曲者、顏を擡げい、曲者「ハイ」と顏を擡げて信之の面体を眺めた曲者は、さも嬉しさうに莞爾と打笑ひ　曲者「我君には御健勝に亘らせられ、お芽出たう存じます　信之「ヤア其方は松崎藤兵衛ではないか　藤兵「ハイ、先刻矢文を以て申し入れました通り、なれは詳しいことは私からお話を仕つりたうございますが、尋常に參つては面白くないと思ひ、●故と御陣所前をば徘徊いたし、疑はしく見せ懸けて生捕られた次第でございます、何卒私の懷中にありまする書面を御覽に相成り、宜しくお執成を願ひ奉つりまする　信之「左樣か」と早々信之は藤兵衛の懷中を調べて見ると、成程一封這入つて居りますから、これを取り出して讀んで見ると

一先刻密書を以て申遣り候通り、砦に火をかけ御味方に參るべく候間、此段宜しく秀忠樣へ御執成願ひ奉つり候

又委細は松崎に御尋ね下さるべく、此上御疎念も御座候
はゞ人質を差しあげ申すべく候以上

八月十八日

小宮山
浅香　花押

とありますから、少時首を捻つて考へて居りました信之が、思はず呵々と打笑ひ、信之「藤兵衛、汝は能くも幸村の中に付けに據り、わが陣中へ參つたな、また〳〵僞らんとする白痴者めが、斯様な淺墓な計略に掛るやうな信之ではない、疾白狀をいたせ、何うぢや」とハッタと睨付けました、すると藤兵衛は面を正し藤兵「こは思ひも寄らぬお疑でござります、その手紙に書いてあります通り、若しも御疑念がございますれば、何時でも人質を差出します、我々が眞に降參を致しますする譯は、近頃幸村は自分の智惠に慢じ、恰悧な者とは云ひながら、未だ若年者ではございませんか、然るに我々をばあつてなきがごとくにいたし、我儘の擧動少なからず、なはつく〳〵考へて見さすれば、成程智あり勇ある幸村、いかに合戰巧手とは雖も、寡は衆に敵し難く、この大軍に抗つては到底勝利のはどが覺束ない、また我々が眞田家譜代の家來ならば兎に角、何を申しても新參のことでございますから、何所までも共に駱れやうといふはどの心もございませぬ、それよりは德川中納言殿に降參をいたし、このお方に從いて忠義を盡し、我家をば興したいと考へます、何卒お疑を晴し、お採用のはどを願ひたう存じます」信之はハラ〳〵と繩を解いて信之「藤兵衛、其方はなか〳〵巧いことを申し居るナ、去りながら汝のやうな者は今更咎め立をいたす要もない、歸れ〳〵」藤兵「スヮヤ、かくまで申してもお採用はございませぬか信之「白痴者めが、左樣なことを聽く耳持たぬわい藤兵「ハヽヽ、一旦降參を申して參りながら、今更陣中へ歸り、何うして安閑といたし居られませうや、眞田をば見捨てゝ

ひ、常御陣へ參つては疑はれ、最早進退維に谷まりたれば、死ぬより外に致方がございませぬ、御免……」といふが否や諸肌を寛ろぎ、キラリと短刀を拔き、パッと左の脇腹へ突き込まんとする、その樣子を篤と眺めた信之は「イヤ藤兵衛、待てッ」とこれを押止めました、付燒刃で腹切の芝居狂言を演らかすのと、實際に死なうといふ奴とは、その顏貌から樣子までスッカリ違ひます、この藤兵衛のは實際死なうといふ決心の相が顏に現はれた、それはその筈でございます、眞田幸村が其方信之の陣中へ參り、斯樣々々にいたして死んで呉れといふから、藤兵衛は無論死ぬ氣で來て居るのでございます、信之も實際に死なうとするから止めた 信之「暫らく待ていい」といふので、早々秀忠殿のお目通りをいたし、右の次第をば具に申述べますと、これとお聞きになつた秀忠殿は「信之、據として捨り物に疑はしいときには、却つて味方の損と相成るぞよ、それはさまでに申して居る者ならば、予が一應會つて遣はさう、此所へ通せい信之、畏りました」とこれから信之は藤兵衛を連れて出ました、藤兵衛は恐れ入つて頭を低げて居ります と 秀忠「コリヤ藤兵衛とやら只今信之より承はつたが、其方は淺香、小宮山等と共に實際當陣へ降參をいたす心得であるか 藤兵「御意にござります、何條嘘言を申し上げませうや、最早德川方に見棄てられましては、何うしても生きて居られませぬ、去りながらお疑を晴す爲ならば如何樣なことでも仕つります 秀忠「フーム、味方に降らうとは神妙の至り、然らばこれより上田方へ立ち歸り、小宮山、淺香の兩名と相談をいたし、いよ〳〵德川の味方に相違ないといふ證據として、大將昌幸の首か、又はこれを生捕にいたすか、この三ッの中を以て本心を見せよ、左すれば充分に取立てゝ得させるであらう 藤兵「ハヽッ、左樣なれば立ち歸つて兩名と相談有難き仕合せにござります、

をいたし、屹度三ッの中の一ッは功を立てませう、御免下さいまするやう」と松崎藤兵衛は嬉しさうな顔貌をいたし、其儘立ち歸つて參り、この事をば幸村に云ひますと、幸村は莞爾笑ひながら、小宮山、淺香の二人を呼びまして幸村只今松崎藤兵衛の使は斯樣々々である、先方の注文は名高い大將と云つて居るから、誰か一人生捕になつて行かねばなるまい兩人「誰が生捕となりませう幸村「何でも確乎した者をばやらなければならぬ」と幸村はしばらく考へて居ましたが、これは餘り好い役ではございません、生捕られて行くのですから、皆面白くない顔貌をして居りますと幸村「これは何うも由利鎌之助が宜からう……鎌之助鎌之「ハイ幸村「其方が生捕になれい鎌之「ハイ、拙者が生捕られて何うなります幸村「其方を縛つて生捕となし、淺香鄕右衛門、松崎藤兵衛の二人が伴れて參り、斯樣々々にいたすのぢや鎌之「ハイ幸村「いよ〳〵の場合となつたならば、先方の陣中で荒れた

ら宜い鎌之「成程、結構でございます、そんなら參りませうぢやア藤兵衛、拙者を縛つて呉れい藤兵「神妙にせい鎌之「さう酷い縛り樣をするな、痛い〳〵藤兵「馬鹿云へ、手緩い縛り樣をしたならば、先方が怪しく思ふから、故と嚴重に縛るんだ鎌之「この野郎め、酷いことをしやアがるといふうちに、到頭由利鎌之助をば縛り上げまする、尤も德川の方からは眞田の動靜を搜るが爲に、斥候の者が出してある、すると澁峠の陣中は何だか大變な騷ぎでございます、かくて淺香鄕右衛門、松崎藤兵衛の兩人が由利をば馬に乘せ、德川の陣中を望んで參り、大久保相摸守の所へ飛び込みまして藤兵「申し入れます家來「何ぢや藤兵「淺香鄕右衛門、松崎藤兵衛の兩人が由利鎌之助をば生捕にいたして參りました家來「エーッ」と直ぐに大久保相摸守の家來が四邊を取り捲いて、由利鎌之助を見ますると、成程雁字搦みにふン縛り、馬に乘せてありますから家來「ソレ鎌之助を引ッ立てい」と直樣

秀忠殿の目通りへ伴れて參りました、鄉右衛門と藤兵衛の兩名は恐れ入つて平伏をすると、眞田伊豆守が前へ進みまして伊豆「コリヤ二人の者、これは如何いたしたのぢや　兩人「左樣でござります、この由利鎌之助は相大將でございますから。　今日は搦手になつた、祝の盃を酌み交さうと、酒宴に事を寄せまして、强て酒を侑め、その油斷を考へまして、これを取つて押へ、漸う縛め上げましたので、味方の同勢が殿いで居りまするうちに、早くも當方へ引揚げて參りましたが、小宮山數馬は上田城へ駈け付けまして、淺香と松崎が德川へ降參をいたし、由利をば生捕つて參つたといふことをば注進いたし、上田城内へ這入つて居りますから、速かに同勢を繰り出され、一擧に上田攻をあそばしまするやう、左すれば小宮山數馬は城内より門を開き、城の要所々々に火を放けまするから、忽ちの中に上田落城は疑ひがございませぬ　伊豆「フーム、左樣か、イヤ其方共の心底は見は

た、千万辱けない、秀忠殿はこれをお聽きあそばして　秀忠「鄉右衛門、藤兵衛兩人「ハヽヽッ　秀忠「能くも當陣に降參をいたした、重く用ゐて遣はすぞよ、當座の褒美といたし、これを與ふるであらう」と二人の者に鞍置馬を一疋づゝ下されたから　兩人「有難う存じまする」と共に大きに悦びました、秀忠殿は由利鎌之助をば御覽に相成りますと、身の丈は六尺五六寸もあり、眼は爛々といたし、無念と思つて居りまする相を現はして居りまするは、天晴天下の豪傑とこそ相見ました、尤も野田の菅沼家において第一の勇士であつた由利鎌之助でござります、秀忠殿は面を柔らげまして、

秀忠「いかに鎌之助、其方は鄉右衛門、藤兵衛と同しくわれに降參をいたし、長く奉公をいたして呉れては何うぢや」すると鎌之助はハヽヽと奥齒を咬締めまして鎌之「無念なり、心外なり見下げ果てたる淺香、松崎の兩名、われに無現酒を侑めながら

その醉ひ倒れたる隙を窺ひ、卑怯にも縛しめ上げるとは何事ぞ憎い奴等である、眞田昌幸殿の日頃の恩を打忘れ、敵に内通をいたすとは、謂はう樣なき人非人、いかでか汝等を安穩に置くべきか、今に見よ〳〵、天罰即座に至らんまたわれは、斯くの通り生捕に相成つたとは云ひながら、今更何ぞ敵に降參をいたさんや、忠臣二君に仕へず、降參などとは不潔はしいわい、速かにわが首を討てい」この折柄伊豆守信之が進み出でゝ信之「鎌之助 鎌之「ハイ 信之「汝の言葉は合点が參らぬ、只今忠臣二君に仕へずと云つたナ 鎌之「左樣、侍たるべき者は君に忠義を盡し、親に孝を盡し、それが爲に命を捨つるが當然、即ち二君に仕へぬ拙者でござる 信之「ふゝ、其方は以前野田の城主菅沼の家來ならずやそれが眞田へ降參をいたしたのであらう、然るに忠臣二君に仕へずとは何事ぢや」と云はれて流石の由利鎌之助も返答に詰り、默念と頭を低けて居りました、この折柄秀忠殿は 秀忠「いか

に鎌之助、只今信之のいふ通り、其方も菅沼を棄てゝ眞田の家來に相成つたのであるから、このたびはわれに仕へては何うぢや 鎌之「ハヽッ」となは暫らく差俯向いて居りましたが、稍々あつて顏を擡げ 鎌之「誠に恐れ入りました、此上からは君の御家來の中へお加へ下されたく、左すれば千万辱けなう存じます 秀忠「左樣か、いよ〳〵我家來と相成るか 鎌之「御意にござります 秀忠「繩を解けい」と直樣繩を解いて、いよ〳〵鎌之助が降參をすることに相成りましたので、關東方は大いに勇氣を得まして、ソレ上田へ乘り込めよと、ドン〳〵澁峠の方へ同勢を進めました然るに澁峠の眞田方は味方同士の騷ぎだから、もうこれは不可ないと思つたか、同勢を纏めて上田へ歸り、スッカリと要害が開けてしまつてありますから、德川方は易々と澁峠を越し、上田の城下へ乘り込んで參り、まづ上田攻をいたさうと、チヤンとその手配りを致しました、このとき眞田伊豆守信之の陣中へ

ヒユーと響をさせて飛び込んで來た一本の矢、信之はこれを取り上げ、直ぐに中納言秀忠殿の御前へ持參をいたし、一同の諸侯方の中央で開いて見ると、これぞ小宮山數馬からの手紙でございまして、今宵早々追手門前まで同勢をお進め下されたく、左すればこの數馬が城門を開いてお入れ申さん、なほまた七八ヶ所へ火を放けて、宵の中に上田城を乘ッ取る都合に仕つる、速かに夜に入るを合圖に押掛を願ひたいといふ文意でございます、サア最早かうなれば猶豫は相成らぬと、大久保、本多、中山、毛利、松平等の儕輩が何れも勇み進みました、中納言秀忠殿のお悦びも如何ばかり、夜に入るを待つて上田の追手へ攻め掛らんとする、此方は眞田昌幸が計略圖に當れりと、まづ城の外なる壕の脇へ穴山小助、近藤無手之助に三百名を從へさせてズッと伏勢を張らせる、追手の門を開いて這入つた所には、巧みに陷穽を拵へました、尤もこの穴の底には槍、薙刀或は刀等

を突き並べ、此所へ敵を陷し込まうといふ計略にござります、なほ城の前に架つてある橋、これはいつ何時でも切つて落せるやうになつてある、其他同勢が宵の中に立ち出でまして、彼方此方へ充分に伏勢を掛けました、かういふ險呑なことがしてあるとは夢にも知らず關東勢、今や先手の同勢が堂々と追手まで進んで參りますと、無紋の提灯が櫓の間にヒラ〳〵と見えました、すると追手の門がギイーと開かんづ有樣、イヤこれを見た關東方は大きに悦び、ソレ乘り込めよと云ひながら、ワッと俄に鬨の聲を造り、大久保、本多、中山、毛利、松平の同勢が、宛然潮の沸き返るがごとき勢を以て、忽ち門を八文字に押開きドッと城内へ乘り込んで參りましたが、もう合戰は勝つてしまつて居るといふ積りですから、足許も何も氣注かない、たゞもう向ふを見て飛び込んだから、豫て拵へあつた、陷穽、その中へ足を滑らしてドン〳〵落ち込みまする、イヤ先手の儕輩は驚

いて ○「ヤア穴があるぞ、危いく〳〵計略だ〳〵」と呼はります
が、後方から無茶苦茶に押して來るから堪らない、これが爲に
陷穽へ陷つて死する者數知れず、このとき漸う二陣三陣におい
ては、何うやら計略があるらしいといふことが分りましたから
○「ヤレ引揚げろヲ、危いぞ」と云ひまする途端に、今まで追
手門前に架つてありました橋そばへ、一時にサツと切つて落され
たから、何條以て堪りませうや、ドン〳〵塚の中へ陷り込み、
これが爲に關東勢が悲鳴を揚げて呼びまするは、實に目も當て
られぬ有樣にござります、このとき櫓々へ現はれました眞田勢
が、塚の中をば望んで大きな石、大きな木などをドン〳〵打ち
投げまするとヽ實に地獄の責苦を眼前に見るがごとくでありま
して、これに中り、或は水に溺れて死する者はその數が知れま
せん、この折柄塚の双方の所に潜んで居りました穴山、近藤の、
同勢が、矢庭に鐵砲の筒口を揃へ、關東勢の眞中央を望んで隙

ち込みました、鬨破こそ眞田の計略に掛つたと、たゞもう一同
騒ぎ立つるばかり、最早悔氣が立つて參りました、時分は好し
と眞田勢、由利、淺香、松崎の三名が、關東勢の陣々へドン〳〵
火を放けて廻りました、これに依つて一方では火事が起る、一
方では八方に伏勢をいたして居りました眞田方が、一時にドッ
と起り立ち、片ッ端から關東勢を擊碎きまするが故に、イヤも
う德川の方は滅茶々々に擊ち破れました、中納言秀忠殿は又も
や我命が危いと思はれたから、今しもその場を引揚げんとあそ
ばしたときに、何でも此度は秀忠の首を取らなければならない
と、鵜の目鷹の目に秀忠殿を狙つて居りましたのは、これぞ馬
場惣市正直と云へる者、これは眞田の家來でありまして、遙か
に秀忠殿の姿を見ると正直「中納言殿、見參」と云ひながら、疾
風のごとくに駈け來り、ドッと突き込んで參りました一槍、秀
忠殿は吃驚いたし、馬を乘り遁へやうといたされましたが、未

だ御運が強かつたか、その槍先が鞍の前の所へカツキと中り、秀忠殿には何の怪我もない、ホイ失策つたと槍を取り直さんとする、その暇に秀忠殿は急ぎその塲を逃れられまする、然るに眞田の家來岩座左京、明石民部、德島藤馬などが、そのお後をは逐ッ駈けて參りまして、今は秀忠殿も危く相成りました、このとき旗本の佐野外記信房と云へる者が前へ進み出でゝ信房「恐れながら君のお着しに相成つて居りまする陣羽織、兜などが目に立ちますから、みな貴主をば狙ふのでございます、何卒拙者に名代を仰せ付け下されたく、左すれば拙者がこの所において君の御名を名乘り、潔ぎよく討死を仕つりますから、君はそのうちにお引揚を願ひ奉ります、左もなければ君の御命が危うございませう秀忠「左樣か信房「ア、外記、能く申して呉れた、其方の忠義は忘れはいたさぬぞよ、然らばこれを取らせるであらう」とその着してお在でになりました陣羽織、兜をば取つて與へら

れ御自分は味方の同勢の中へ紛れ込み、其儘何所ともなく引揚られました、後に佐野外記は右の武具を着け、後方を回首り、イザ思ふ存分に勇戰をいたし、君の御名代となつて相果てんと馬に誇りながら、大音を揚げ信房「ヤア〳〵遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、われは關東將軍德川家康の悴江戸中納言源秀忠なり、只今討死と覺悟を定めたれば、われと思はん者は近寄つて首を擧げよ」と呼はりました、これを聞いた岩座左京、明石民部、德島藤馬の三名は、大いに悅び、われこそ討取つて功名にいたさんと、ドッと三方から斬り込んだ、これをば事ともいたさぬ佐野外記信房は槍を捻りながら、これなる三名を敵手に暫時突き合つて居りましたが、流石は槍の達練家だけありまして、その穗先がなか〳〵鋭いから、今は三名も取次筋斗になり、さても中納言殿はこれほどの手の中とは思はなかつた、なか〳〵の腕前であるわいと、心中大いに驚きま

した、そのうちに岩座左京が背後へ廻りましたから、佐野外記はホイ朱策つたと回首らうとする途端に、ヤッといふ聲諸共に掘と斬り下した一刀は、佐野外記の左の片腕をば斬つて落しました、最早これまでなりと思つた佐野外記は、秀忠、秀忠なるぞ、首を討てヲ」と大音に呼はるなり、馬より揉と落來ちたから、三名の者は飛び込んで首を攫げ、ヤレ嬉しやと思ひながら、その首に陣羽織、兜を添へて城内へ持ち歸りました、この合戰に徳川方は滅茶々々に打破れまして、名ある勇士で討死をいたした者は相良左衛門、杉原帶刀、大口又兵衛、戸澤石見守、堀尾七郎、同八郎、佐野外記、戸澤金八郎、根淵兵馬、松平因幡守森田治部等を首めといたし、雜兵八百有余名、怪我人は數知れず、實に酷い目に遭つたものでございます、眞田幸村は思ふ存分に徳川方を惱まし、ドッと城内へ引取りましたが、爰に岩座左京　明石民部、徳島藤馬の三名が、右の秀忠殿の首と陣羽織

兜とを持ち來り、イザ首實檢といふことになると、幸村は呵々と打笑ひ「幸村「其方等は之れを中納言だと思つて居るか、何者か は存せぬが、定めて名ある旗本ならん、これは中納言の身代りとなつて死んだのである、去りながら其方等の働作は天晴である、太儀々々」と賞めまして、なは一同の勇士兵士をば厚く勞はりましたが、敵手の徳川方は重ねの敗軍、一同氣が疲れてしまひまして、たゞ城を睨みながら、無念の齒を噛締むるばかり、これより秀忠殿は無念やる方なく、この恥辱を雪がんと、總軍に下知をいたし、上田總攻を掛けやうと致しまする、然るに眞田幸村が又もや謀計を以て、これをば撃破りまするといふ、最と壯快なるお物語に移つて參ります。

第六席

江戸中納言秀忠殿は危險を脫れまして、遙かの山手へ落延び、

此所に奏の旗を指揚げられます
これを見て馳せ集まりましたから、即座に十二万余の大軍と相
成り、再び本陣を立つることに相成りました。このとき秀忠殿
は諸将を召寄せられまして秀忠「さて其方共、斯る小勢を敵手と
いたし、戰ふ度毎に破れるは殘念の至り、このまゝ退くことも
相成らぬ、予は最早死すとも一歩も退かぬ心得である、いま一
度思ふ存分に合戰をいたし、われ彼れに討たるゝか、われ眞田
の首を討つかといふ、有無の合戰を試みん、如何なや」この折
柄前に進みました大村伊豆守信時と云ふ士が信時「御意にござり
ます、然らば明日卯の一天より上田總攻をおそばしては如何で
ございます秀忠「ム、、予も左樣に心得る、先づ總攻より外に仕
方があるまい、早々その準備をいたし、上田總攻と云ふので十二万の同
勢が兵粮萬端の準備に及べい」と云ふので十二万の同
すと、こゝに誠に厭煩い評判が立ちました、何しろ合戰の都度

の敗軍でございますから、八間と云ふものは疑ひ深いもので、
やうも眞田伊豆守、同隠岐守の兩人が怪しい、こんなに負けて
ばかり居るのは、この兩人が城内と共謀になつて居るのかも知
れないなゝ云ふことをば、チヨイ〳〵發言して來ましたが、
中納言秀忠殿は眞田の兩名が、
は篤より存じて居られますから、さう云ふ人物でないと云ふこと
い、兩名の士を呼ばれまして秀忠「兩人の者、兩名「ハイ秀忠「誠に苦
蠅い評判が立つて居るから、其方共は一旦安中まで引取つて吳
れ、其中にみなの疑の晴れたならば、また〳〵當方へ召寄
せるであらう兩名「有難い仕合せにござります」とこれより兩人
は同勢を纏め、安中まで引取つてしまひます、此方は眞田幸村
が關東勢の陣中の動靜を見ましてイザ目に物見せて吳れん」と充
總攻をいたすものと覺悟をして居ります、早くも翌日に相成ります
分に合戰の準備をいたして居ります、

と、　關東の大軍は上田城を、指して進んで參り　○「ソレ攻め寄れ」ッ」と金鼓亂拍子に打鳴し、ドッと鬨の聲を揚げ、十重二十重に取圍みながら、上田城を踏破らんばかりの勢ひを以て、竹束などをばドン〳〵塀へ投げ込み、みな飛び入り〳〵城の塀へ攀ぢ登り、いまや城内へ乘り込まんとする。このとき城兵共は塀の上に現はれ、竹の皮をばバラ〳〵と散き始めたから、イヤ驚いた關東方　○「オイ〳〵、また妙なことをするぞ、竹の皮をば放り出したが、中に何か包んであるのだらうか　△「馬鹿云へ、何が包んであるものか、皮ばつかしだ　○「これが眞個の好い面の皮だらう　△「酒落どころの騷ぎぢやアないヨ、氣を注けろ　○「何しろ可笑しい物を放るぢやヤないか、昔から合戰に竹の皮を放るなどゝ云ふことはない、こりやア我々の命をば竹の皮に包んでしまひ、眞田の家來の傍輩が土產にでも持つて行くのぢやアなからうか」などゝ言ひ出す奴もある、併し關東方は大軍の

ことでありますから竹の皮くらゐには怖れない、いまや石垣に縋り、塀に飛び附き、ドン〳〵攀登らうといたしますと、上田方は散々に竹の皮をば投げて置いた其後は、おの〳〵柄杓を持ち、關東の同勢を望んで、ドッと上から打浴けまするば、これなクラ〳〵沸いて居りまするドロ〳〵の粥でございます、その粥のドロ〳〵とした熱いやつを浴けられては堪らない、これには粘氣がありますから、イヤ厭いた關東方　○「熱い〳〵」と呼ばりまする、それはさうでせう、お粥の御饌應厚く受けますとも云つて居られない、鎧武具の隙間より肌に染み込んで來るから軍兵共はその熱さに堪へ兼ねて、ヤレ苦しやと、ドン〳〵逃げ出しました、すると前に投げた竹の皮が、其邊に一面散亂つてありますから、その逃げる奴が竹の皮にてツルッと滑り、コロ〳〵と其所へ轉がりますと、其上へまた逃げて來る、下の奴は踏殺される、イヤどうもその慘狀と云ふものは、實れとも想か

とも云ひやうがございません、本陣の秀忠殿はこれを御覽に相成つて、余りのことに呆れ返り、暫らく茫然としてお在であそばしましたが秀忠「ア、眞田と云ふ奴は大變なことを致すわい、なほ此上どんなことをするかも知れない引鉦を鳴せ〳〵」と仰しやッたから、到頭引鉦を鳴し、一旦同勢を引揚げました、これが爲に折角總攻をしやうと思つた勇氣も挫けてしまひましたが、別に討死をした者はございません、其代りに火傷をした者は、何百人何千人あるか分らない、其上踏殺された者が、大分に在ります、戰場で踏殺されるなどゝは、氣の利かない死狀です、全で話の種になりません　○「井上、尊公のお父上は如何した　井上「憚りながら信州上田攻の折柄　○「フム　井上「味方の同勢の爲に踏殺されました」そんな馬鹿なことも云へません、誠に情けない死狀です、秀忠殿は手を出しさへすれば敗ける、よく彼んなに斯うすれば如彼すると、種々な考を付けをつたものだと

たゞもう呆れてしまひ、それより三日ばかりは合戰を出さずに居られましたが、今日しも大久保相摸守、松平土佐守の同勢が偶爾と向方を見ますると、上田城の搦手の傍に方り、ズッと一面の麥畑がある、此所へ眞田の兵士が立出でまして、ドン〳〵稻刈を始めて居りますから　○「ハヽア、さては城内では大分兵粮に困つて來をつたと見にるナ、併し呑氣な奴もあるものだ、この合戰の最中に稻刈を始めやアがる、これをば默つて見て居ちやア余り味方に氣勇がない、彼の稻刈をして居る奴等を逐ッ拂つて遣らう」と此趣をば本陣へ言ひますと、それくらゐの事はしても構はぬ、そんな者を打遣つて置くと、いかにも德川の同勢が柔氣になつたやうだ、早々逐ッ拂つてしまへと云ふので忽ち大久保相摸守、松平土佐守の同勢が打揃ひまして、眞田勢の稻刈をして居る所へ密と廻つて參りますと　○「ソレ討てッ」と云ふなり、ドッとばかりに乘り込みました、すると稻刈をし

て居りました雑兵共は吃驚仰天、漸う稲を刈り、これから背負つて行かうとする處で、グッスリ荷が造へてある、其荷をばみな打遣つてしまひ、われ先きにと周章狼狽ながら、ドン〳〵城内へ逃げ込みました、關東方はこれを逐駈けもしない、山のやうに造へてある稲の荷、これを合捕つて置かうと、ドン〳〵我陣中へ運んで參りまして、秀忠殿へこの趣を申し上げますと、

秀忠「それは好いことをいたした、これで少しは無念が晴れたわい、明日からまた合戦に着手ることにいたさう」と其日は合戦を休みました、然るに夜分に相成りますと、何となく陣中に幾な臭氣が立つて來たから居りまするうちに、ドッと火の手が燃え上つて參りました、陣中では火事だ〳〵と云ふ騒動、これは何うしたことかと云ふ今日晝間分捕つて來た稲の束から火が發たのです、こいつを見たときには、徳川の同勢もアル〳〵と頭へ上り

○「ソヲまた眞田がこんなことをしやアがつた、ソレ防止めろ」と呼はりましたが、何しろ敗色が立つて居る所へ、また計略に罠つたと云ふ氣があるから、たゞ味方の同勢は崩るゝばかり、秀忠殿は何度も徹りて居りますから、これは到底迂

田の謀計だ、稲束の中へ火を仕込んで置くとは思はなかつた」と右往左往に騒ぎ立ちまする、この折柄上田城内から三方の門を押開き、ドッと乘り出して參りました、その一手の大將は眞田左衛門佐幸村でございまして、別府若狭、春田縫殿助、近藤無手之助、海野六郎等の三百余名、一手は穴山小助、由利鎌之助等が大勢と相成り、これも三百余名、一手は新左衛門入道清海、新兵衛入道淵三、小宮山數馬、淺香郷右衛門等が大勢と相成り、これも同じく三百余名を從へまして、ドッと三方から攻め立てます、關東勢は稲束から火が發て騒動になつて居る、ところへ三方から攻め掛けられたから、イヤ一同大いに驚いて

○「ソヲまた眞田がこんなことをしやアがつた、ソレ防止めろ」と呼はりましたが、何しろ敗色が立つて居る所へ、また計略に罠つたと云ふ氣があるから、たゞ味方の同勢は崩るゝばかり、秀忠殿は何度も徹りて居りますから、これは到底迂

路ついて居られないと、馬に鞭を打ち、一生懸命に駈けてお來でになると、正面の方より六文錢の旗を翻へし、その同勢五百人ばかり、関の聲を揚げて乘り込んで來たから、イヤ騒いだ秀忠殿、秀忠「さてはまたこの所へ眞田の同勢が廻つたか、最早このたびは逃れぬ、潔ぎよく腹切つて相果てやう」といま陣太刀の柄に手を掛けやうとする所へ、眞先に馬を乘り出だした一人の大將信之「アイヤ我君、恐れながら御短氣をお出しあそばすな、眞田伊豆守信之にて候ふなり」秀忠「オヽ信之か」と秀忠殿もおもはず胸を撫で下した、これは眞田に違ひないが、信之の方だから安心でございます、もう秀忠殿も眞田には酷い目に遭つて居りますから、六文錢さへ見ればガヤ〳〵と頭へます尤もこの六文錢といふものは餘り宜いものではない、冥途の土産に持つて行く錢です、そのうちに眞田信尹も駈付け、信之、信尹の兩手の間へ中納言殿のお身体をば圍つてしまひます、

秀忠殿もこれで安心と吻と一息吐かれました、此方は上田の城下において、八方へ崩れ渡りまする徳川の同勢、これに打ち勝つたる眞田の同勢は、何でも片ッ端から討ち取つて呉れんと、縦横無盡に斬り廻つて居りまする、然るに毛利民部少輔は大將秀忠殿が眞田信之等に助けられたことは知らないから、中納言殿のお身の上が心許ないと、此所彼所と捜し廻つて居る中に、向ふから歩つて來たのは穴山小助、小助「ヤア〳〵」其所に在るは徳川家の大將毛利民部少輔と見たるは僻目か、穴山小助なり、見參と大喝一聲槍を捻つて突き込んだから少輔「ヤア猪牙才なり」と民部少輔は陣太刀を拔いて、一二撃三撃打ち合ひましたが、その内に小助の突き込んだ槍は馬の太股を貫いたから、馬は屏風を倒すがごとくに打ッ倒れる、それが爲に民部少輔は馬上に堪らず、揉と轉がり落ちました、得たりや應と穴山小助、其上へ乘り掛つて民部少輔の首を擧げまする、然るに一方では松平土

佐守、同下總守の同勢が、本陣に倒れてありました、葵の紋の旗を押樹て、味方の同勢をは集めやうといたして居りまする所へドッと乘り込んで來たのは三好新兵衛入道爲三でありまして、この同勢の中に秀忠殿がお在でになると思つたか、勢ひ鋭く斬つて入り、當るを幸ひに斬り立てゝ居りまする、これを見た松平下總守氏照は氏照「ヤア匹夫の分際をしながら、味方を討たうとは何事ぞ」と薙刀を打ち振つて抗ひますと爲三「何を猪牙才なることをいたすか」と爲三は陣太刀を以てこれを受け、暫らくの間撃ち合つて居りましたが、下總守氏照がヤッといふ聲諸共に眞甲から斬り下して參りました薙刀、パッと身を沈めた爲三の横に拂つた一刀は、下總守氏照の腰の邊へ斬り付けた、馬上に堪らぬ氏照は、ガヲ〳〵撞と落ちまするところへ跳り蒐るや否や氏照の首を擧げました、かくのごとく大將下守總氏照が討たれたから、これなる同勢はドッと崩れ渡りまする、一方にお

いては眞田幸村が、伊達陸奥守政宗公の同勢を望んで乘り込み來り、大音を揚げまして幸村「ヤア〳〵政宗殿、見參いたさん」と呼はりながら突き蒐つて參りますと、伊達の家來石川頼母、片倉小十郎、茂庭右衛門などゝ云へる者が、必死にこれを防止めて居りましたが、何分眞田の勢が鋭い、そのうちに幸村の家來三輪琴之助が伊達政宗公の姿を見ると琴之「ヤア〳〵伊達政宗殿、われは三輪琴之助なり、見參」と呼はつて乘り出さんと致しまする、これを聽いた伊達政宗公政宗「オヽ望む敵である」と今御自分が馬を乘り出さんといたされた、このとき石川頼母が樹に縋り頼母「恐れながら我君、只今お進みに相成る場合ではございませぬ、我一手が如何ほど防止めやうといたしても、かくまでに味方が崩れ掛りました以上は、到底止まる氣遣ひはございませぬ、誠に殘念ではございますが、一旦この場はお引揚げを願ひます政宗「ふゝ、然らば左樣にいさう」と政宗公は漸う氣

を取り直し、ドッとこの場を引揚げました、引揚げたといふと大變に体裁が宜うございますが、その實は逃げたのです、明治の今日で云へば退却をいたしたといふ、かゝる有様ですから、徳川方の名ある大將は多く討死をいたす、これに依つて幸村は思ふ存分に勝を制し、其儘上田城内へ引揚げました、然るに關東方は互ひに顔を見合せまして、眼をパチ〳〵といたし、もう合戰をする勇氣も何もなくなつてしまひました、中納言秀忠殿は後へ引返してお來でになり、同勢を纒めまして、能くもこんなに敗けたものだ」と御自分ながら不思議なくらゐです、もう手を出すな、このうへは上田の城を取り巻いて、兵糧の盡きるを待つより外はないと、たゞ遠巻にいたし、上田城をば睨んで居りまするうちに、早くも五六日經ちました、このとき美濃國關ケ原においては、徳川家康殿が石田治部少輔三成と大合戰に及ばれましたが、石田方には浮田、島津、小西、安國寺、立花

なをいふ諸將が備へを立てを致しました、これに引換へまして、徳川方は小勢にて出で立ち、その勢危く見ゆました所へ、石田方の金吾中納言秀秋が變心をいたし、圖らず裏切に及びましたので、遂に徳川方の勝利となり、石田三成を首め小西、安國寺等はみな生捕られ、大谷刑部少輔吉隆等の勇將は悉く討死を致しましたが、これは關ケ原の合戰でございまして、當眞田三代記には關係が薄うございますから、茲にこれを省くことゝ仕つります、さて幸村は上田の城に在つて、働き中納言秀忠殿を惱まし、關ケ原の合戰の間に合はぬやうにいたして居れば、その うちに石田三成が思ふ存分に勝利を得て吳れるであらうと、種々に謀計を繞らして居りましたが、今宵も天文台に登り、つく〴〵天文を測つて居りました、すると怪ぶなる星がおひ〳〵と現はれて來るから、暫時首を捻つて居りました幸村は、天文台を下り、早速卦を立てゝトひました、合ふも八卦合はぬも八卦

と申しますが、決してさうではございません、八卦といふものは命ふべきものです、尤もその心得を以てトはなければなりません、大阪などでは能く道傍に怪げなる賣ト先生が出て居る、これに二錢の赤銅を放り出してトて貰ふ、そのトでも合はぬとは云へません、併し百度トて百度とも必ず合ふといふ譯には行かない、我心がヅッと沈着いて、充分それに氣が這入り、トる人もまた一心になつて察るから、その八卦が適るのでございます、また一ッは判斷の仕樣にもあるのださうですが、幸村のはさういふ怪げな八卦の見樣ではない、暫時の間、本筮を立てゝ考へて居りましたが、思はずァッと聲を揚げ 幸村「ア、これまで盡せしことも水の泡と相成つたか、無念なり、口惜しや、德川の威勢盛んにいたして、豐臣は漸次に衰へるものか、ア、悔なきことであると無念の齒を噛んで居りましたが、直樣昌幸の所へ參りますと、昌幸は腕を組んで、何か思案に暮れて居りま

した 幸村「お父上 昌幸「伜、なんぢや 幸村「關ヶ原においては石田、小西等が敗軍を致しましたは 昌幸「ム、、其方には相分つたか 幸村「只今天文に依つて察しましてござります 昌幸「ム、、われもその通り、計策は人に在り成敗は天に在りと、孔明の申したるも宣なるかな、我々が今日まで盡したることは、水泡に歸したり、殘念の至りである、其方はこの末如何いたすの了簡ぢや 幸村「左樣にござります、もはや石田、小西が滅びたとして見ますれば、この上田城において幾度關東方を防止めても致方がございませぬ、誠に殘念なれども、まづ城をば開渡し、而して我々は命を完ういたし、靜かなる所に悠々と日を送り、天下の形勢を窺ひ秀頼殿が十五歳に相成られても、德川が天下を渡さぬやうなことあらば、その時こそは秀頼殿をお佐け申し上げ、再び合戰をとは存ますまい 昌幸「左樣ぢや、其方のいふ起すより外に仕方がござりやう 幸村「就きましては我心と符合いたり、然らば左樣にいたさう

ましては最早合戰の仕終め、徳川の同勢の頭の中に、眞田幸村はかゝる剛の者、實に恐るべき者であるといふ思を染して置かなければ後の爲に相成らぬかと考へます、因て明日こそは思ひ切つた激戰を仕つり、其上事を計ひませう昌幸「ムヽ、それも宜からう」といふので、茲に幸村は今回こそは合戰の仕終め、思ひ切り働いて呉れんと、脇を擦つて居りましたが、早くもその翌日に相成りますと、穴山小助、近藤無手之助、由利鎌之助、淺香郷右衛門などゝいふ勇士並びに同勢三百人を引率れ、上田の追手の門を八文字に押開き、幸村は堂々と馬に乘つて乘り出しました、徳川の同勢これを見て○「ヤア此度は眞田の方から手出しを始めたぞ、驚破こそ準備に及べよ」とみなおの〳〵準備に掛りました、この折柄幸村は大音を揚げまして幸村「ヤア〳〵關東の同勢、たしかに承はれ、われは當上田城の主安房守昌幸の次男左衛門佐幸村なり、今日こそは徳川の同勢へ目に物

見せて呉れんづと、只今此所へ罷り越したのである、われと思はん者は來つて勝負に及べッ」と槍を取つてハッタと睨まへました、その扮裝は幸村好みの白絲源平縅分の大鎧、同じ毛絲五枚鎧の雁金、前立なしたる兜を眞甲猪首に押戴き、白羅紗に金字を以て六文錢を高繡なしたる陣羽織を一着なし、小牧鹿毛と名づけたる大馬に住吉八景の高蒔繪なしたる伊達鞍置いて打ち跨がり、紺白紫三段染分の手綱を腰に結び附け、ハッタと睨みましたその勢、勇ましくもまた恐ろしく相見ゑました、これを眺めた關東の同勢が○「ヤア勇ましき若大將かな、然らばわれ討取つて手柄にいたさん」と馬をば乘り出して來た一人の大將利里「ヤア〳〵われこそは三州苅屋の城主須藤伊賀守利里なり、見參」と呼はりながら、槍を捻つて突き蒐りました、このとき幸村は心得たりと同じく槍を取り直し、暫時搦んだかと思ひまするとと幸村の手練に何ぞ敵せん、ヤッと一聲懸けるや否や、須

藤伊賀守の胸板を貫いたから堪らない、アッと仰向に轉がり落ちました、ところへバラ〳〵と駈け寄つた穴山小助が首を擧げまする、これを見るなり丹後宮津の城主水野采女正正重が須藤殿の敵であると聲を懸け、陣太刀を拔いて斬り蒐つたから、心得たりと幸村は暫時体を捻つて擊ち合つて居りましたが、パッと飛び違へ樣に槍の石突を取り直し、正重の眞眉間をば發矢と打ちますと、これまた馬上に堪らず、撞と仰向に落來ちまするところへ同じく飛び込んだ穴山小助、早くも正重の首を掻斬りました、これを眺めた三河の住人蒲次郎冬次、これまた陣太刀を取り、我名を名乘つて斬り蒐りまする、莞爾と笑つた幸村は心得たりと云ひながら、暫時の間擊ち合ひましたが、そのうちに次郎冬次が打物では叶はぬと思つたか冬次「イザ組んで勝負をいたさん」と呼はりました幸村「いかにも承知をいたした」と幸村も同じく大手を開げ、馬上ながら無手と組付きましたが、幸

村は宛然鞍より生ねたるがごとく、押せども引けども動きませんから、次郎冬次は身を揉み焦るそのうちに、幸村は莞爾と笑ひ幸村「汝の力量も最早これまでなるか」と腕を差伸ばし、冬次の襟頭を引ッ摑み、ズル〳〵と我胸の邊へ引附け、鎧通を拔いて、プスーリと冬次の首を掻切つた、この働作を眺めました一同は、思はずアッと聲を揚げ、みな呆れ返つて居りまするど、幸村はその首を投げ付け、ヒタリと槍を取り幸村「イザ來れッ」と身構へました、これを見た森右近大夫長政は長政「われこそ討取つて呉れん」と金剛兵衛盛高の鍛へ上げましたる薙刀を取り流々とこれを振り廻して參りました、ニッコリ笑つた幸村は、幸村「オヽ好き敵である」と暫らくの間擊ち合つて居りまするうちに、右近大夫の斬り込んで參りました薙刀に、自分の持つて居りました槍をば搦んだかと思ふと、ピコーッと遙かの空天へ刎上げた、こは叶はぬと思つたか、右近大夫は馬に一鞭當てな

がら、ドン〳〵その場を逃げ出しまする、幸村はこれを見るなり幸村「ヤア穢き敵の挙動かな、未練者めが」と云つゝ居りまする所へ、牧野帯刀、福島主膳の両人が双方から槍を以て突き竟つた、これを物の数ともいたさず、幸村は左右に敵を引受けて暫らく接戦ひ居りましたが、そのうちに福島主膳の槍を叩き落し、アッといふ所をば早くも首をザクーリ突差しました、牧野帯刀はこりやア堪らぬと、バッと馬をば乗り下げやうとする途端に、一槍の下にこれを突き落し、忽ちの間に五人の勇士を討取りました、このとき麻生太助、滝川平馬、望月一學の三名の者が、名を名乗つて突き竟つて来る、幸村はこれを敵手に暫らく戦ひましたが、看る〳〵うちに三名の者をば右左正面と突いて落しました、その手練の早業は目にも留まらない、すると水野源左衛門と名乗つて突き込んで来たから、又もやこれを敵手に撃ち合ひましたが、これまた源左衛門の槍を脇の上

美事にその首を掻落し、以上九人まで討取りましたから、これでもう敵手はないのかと、幸村は血に染りたる槍を取り上げ、白羅紗は敵を突いたる返り血を浴び、朱羅紗に染つてしまひ、両眼血走り、ハッタと彼方を睨みましたその有様は、彼の三國誌の名高き張飛といふ豪傑が、曹操の百万の大軍を睨み返したのも、かくやあらんと思はれまするばかりにござります、このとき獅々頭の兜を一着なし、紺絲縅の大鎧、月毛の駒に打ち跨り、青母衣を掛け、大身の槍を馬の平首に押附け、大音を揚げまして輝秀「ヤア〳〵われこそは徳川家随一の剛の者と云はれたる大須賀七郎左衛門輝秀なり、幸村殿、見參」と呼はりながらドッと突き蒐つて参りました、これを聴いた幸村は幸村「ヤア物々しい名乗方かな」と槍を取り直し、ヤッといふ声諸共に、互ひに槍を突き合ひましたが、流石の幸村も驚いて、大須賀七郎左衛門の腕前も、なか〳〵鋭いから、これは恐ろしい奴だわいと

思ひながら、暫らくの間必死になつて駈ち合ひましたが、そのうちにこれは尋常では討てぬと思ひましたか、幸村はドッと馬の頭を返し、遥かにその場を逃げ出しまする、七郎左衛門はこれを見るなり輝秀「ヤア卑怯なり、逃げるは何事ぞ」とその後を逐ッ駈けて参りましたが、幸村が今一段乗り過さんとする所へパッと突き出しました大須賀の槍、体を沈めた幸村は發矢と大須賀の槍を握つて居たやつをば、ヤッんとする折柄、幸村は片手に取つた槍をば幸村「ヤーッ」といふ声諸共にビューッと七郎左衛門を望んで投げ附けた、七郎左衛門は自分の槍を持ちながら、パッと体を捻らうとする、その隙を考へまして、幸村は大須賀の槍を握つて居たやつをば、ヤッといふと弛めたから、途端に引かれた七郎左衛門、已れは槍を掴んで居りまするから、その自分の力でドーリと仰向に落馬致しました、ところへ飛び込んで参りました別府若狭が、若狭「こ

の野郎、到頭拙者の所の大将の計略に罠つたわい、跡前が强ければ計略で勝つ、何でも來いた」と取つて押へてバッと首を斬つた、これぞ後の世に至るまで有名き幸村の十度槍といふ働作にござります、この幸村といふ人は計略ばかりかと、今までみな思つて居りましたが、今日この十度槍の働作を見た關東勢は、たゞもう舌を捲いて呆れました、これが關東方の頭の中にその後大阪合戦のときに、幸村が立ち出でまするとて能く徳川方から一騎討を望みまして、詰り幸村は腕前も出來れば智恵もあり、また學もあり、何でも來いといふ人でありたのでございます、これで幸村はこの合戦の働きにより、最早その日も夕景に相成つたから、味方を纏めて城内へ引き揚げました、さてこれだけ敵を惱まして置いて、おのれ等は上田の城を開き、無事に命を助かり、秀頼殿十五歳に相成られるまで待たうといふのは、なか〳〵出來ないことでござい

ます、且つこの城をば敵の手に渡すのは殘念、切めてのことに敵ながら伊豆守、隱岐守にこれを渡さうと、こゝに昌幸、幸村の兩名が考へまして、これより別府若狹を以て關東勢の方へ使者を立てまするといふ、名題の眞田幸村最後の大器量、上田開城の一條にござります。

第七席

かくて幸村は一先づ城内へ引揚げましたが、最早これで合戰は いたすまいと云ふ覺悟でございます、その翌日別府若狹と呼び まして、一斯樣々々にいたせと吩附けました、すると若狹は早速準備をいたし、眞田伊豆守信之の陣前へ參り若狹「ヤア〳〵陣中へ物申さん ○「誰ぢや若狹「われは城内より參つた別府若狹と云ふ者で、信之殿に申し述べたき義がある、左樣取次ぎ給へ」雜兵は驚きながら、伊豆守信之の許へ駈け附け、此趣を申しますと

信之「フーム、左樣であるか、イヤ又しても第幸村がわれを謀らんといたし、別府若狹を使者に寄越したか、宜い〳〵先づ此所へ呼び込んで見よ、○「ハヽッ」別府若狹は案内に伴れて通入つて參り、悠々と其所へ着席をいたし、頭を擡げて見まする と、正面に眞田伊豆守信之が、恐怒の眼尻を切上げて控へて居ります、若狹は兩手を突いて若狹「これは〳〵伊豆樣には、相變らず御健勝に渡らせられ、お芽出たう存じます 信之「だまれッ、汝はわれに對つて挨拶をいたす點があるか若狹「これはしたり、私は御父君の家來でござりまして、貴方はその御子息なれば、御主人といたして禮義をなすは當然でござりませう 信之「云ふな〳〵其方は先達て我妻を欺き、安中の開かして通り過ぎたは何事ぞ主を偽はる不屆者め 若狹「ハヽッ、其義についてお叱りとあれば申し上げます、私も眞田の祿を食んで居りますれば、主命に反くことは相成りませぬ、野州小山において御親子の間柄双方に

別れ、御父君昌幸殿は上田へ引揚げんとおそばしました折柄、貴方の奥様おすみの方が、これを討たんと謀られたるに依つて私が主の仰せを蒙り、事穏便に濟まさんが爲に、故と欺はつて通りましたので、因て私を咎めらるゝよりは、貴方の奥方を咎められまするやう、苟且にも父君と云ふお名前の附いた御方に抵抗をいたされますのは、これ即ち父君を輕しめらるゝの致方なほ又只今貴方から私に對つてのお言葉は何事でございます余り父君をば輕んじあそばすな、君に忠を盡す者は親に孝、其孝の道を欲く者は必ずや不忠と承はる、如何でござりまする」と若狹は滔々と述べ立てました、信之は理の當然に赤面をいたし暫時言葉もございません、若狹は言葉を續けまして若狹「さて伊豆様、私が此所へ參りましたのは餘の義に在らず、只今御覽に入れまするこの書面、何卒御披見を願ひたう存じます」と懷中より取出した一封の書面、これを信之の前へ差出しますと、信

之はこれを披いて、一通り讀み了るや否や、烈火のごとくに憤り、忽ち寸々に書面を破つてしまひ信之「不禮者めが、これも弟幸村の謀計ならん、過日も降參をするなどゝ申して、由利、渡香、松崎の三名を機關に使ひ、德川方を上田城内へ誘き寄せて種々様々の計略を巡らし、伏勢を以て大軍を惱ましたり、それがために我等は德川方より思はぬ嫌疑を被つたのである、然るに今また斯る淺薄なる書面を以て、我々を謀らんとは何事ぞ以ての外のことである、汝も同じ穴の狐、長座いたさば手は見せぬぞ」と威猛高になつて罵りました、若狹は少しも恐れず若狹「左様でございますか、疇昔より戰端を開くに當り、臨機應變に虛實の二途を使ふは、これ勝利を得んが爲の手段にござります而してこれを能く看別くるを以て良將といふ、先達てのは嘘言今日のは眞實でございます、よく〳〵御思案あそばしまするやう、失禮ながら貴方は御若氣に逸りたまひ、輕々しく事をした

まふ、今こそ貴方が忠孝の両道を全ういたされまする時でござりまする　信之「だまれッ、其方は口賢く云ふ奴かナ、日頃より叶はぬヤア〳〵誰そある、此奴を陣外へ逐出せい」といふ鋭き一言に大勢の家來がバヲ〳〵と近より、寄つて集つて若狭の手を取り之れを陣外へ放り出しました、後に信之は火のやうになつて怒つて居ります、ところへ一人の家來が參りまして家來「申し上げます　信之「なんぢや　家來「仲父君樣が參られました　信之「エ、左樣か」と云ふうちに御々と這入つて參りました　隠岐守信尹　信之「如何いたした　信之「イヤ仲父上、どうも父上の致方は、余りと申せば無法でござる、また〳〵私や貴方を欺はつて、徳川と不和にさせやうと云ふの謀計、今になつて私に降參を取持て、詳しいことは若狭より聽くやうにと云ふので、一封の面書を持たせまして、只今別府若狭を寄越しましたが、私は余り殘念に心得ましたから、その書面を引破つて逐返しました」これを聽いた隠岐守信尹は、齢の甲より年の功、年は老りたいものでござります　信尹「信之　信之「ハイ　信尹「其方は何故斯樣な粗忽をいたしたのぢや、假令敵味方となつて相別れても、其方の爲には現在の父ではないか　信之「ハイ　信尹「我爲には兄である、その兄たり父たる昌幸殿より寄越された使者ならば、假令如何やうなことがあらうとも、相當なる待遇をいたし、其上偽か眞かを考へ、而して後に事を計ふのが道であらう、然るにその得面を引破り、使者を逐返すとは何たる粗忽ぞ、不孝者めが」と云はれて見れば信之もつひ若氣の至り、成程惡かつたわいと思ひましたが　信之「仲父上、いかにも私の心得違ひでございました……コレ、早く別府若狭を呼び戻せ　○「ハヽッ」と直ぐに家來の者が陣外へ飛び出しました、此方は別府若狭がヒョコ〳〵と歩き出す、ところへ背後から駈けて來た　○「御主人が仲公を呼び戻

二三人　○「別府殿、若狭殿　若狭「ヘイ　○「御主人

せと云はれますので、どうかお引返しを願ひたい　若狭「イヤ暇不孝の信之殿、人でなし、人間でなし、最早會ふ用はとさられ、○「イェ何かは存じませぬが、是非呼び戻せと云ふことでございますから、何卒お歸りを願ひます」と三四人の者が無理に若狭を伴れて歸りました、すると伊豆守信之は　信之「ヤ　若狭、予は若年のことゝて何の分別もなく、　圖らず其方へ不禮を申した　が、荷且ならぬお父上の使者、不禮の段は免して呉れ　若狭「へゝ、余りの御立腹、私も一時は驚き入りましたが、最早お心附きあそばせば何よりでございます」　このとき傍らより　信尹「さて若狭、使者の趣は略ぼ相解つた、去りながら其方の口上のうちに忠孝兩道を全うせんともるは、この歷岐に一向解せぬ、何かお兄上より御内命があるならば、その奥底を話して呉れ　若狭「ハゝゝ、然ちば申し上げまする、何卒お人拂ひを願ひます　信尹「宜い〳〵」　と四邊の者を斥けまして　信尹「なんや　若狭「御意にござります、御主人昌幸殿や幸村殿が籠城をあそばしますのは、これ偏に豐臣の恩を思召されてのことで、石田小西を逆賊と知りながら、大阪方へ味方をいたし、鳥川へ抵抗を致されましたが、これは深き所存がありてのことでござります、然るに關ヶ原の合戰は脆くも大阪方が敗軍と相成りました　信尹「左樣か　若狭「それは未だ注進が參りますまい、なれども眞田御親子は最早承知をいたして居られます　信尹「ふゝゝ　若狭「かく石田、小西等が打破れましたる上は、我々が上田の小城に楯籠り何所までも江戸中納言殿を遮斷めて何といたさう、それよりは速かに城を開き、何所かの山中に引籠り、世を安樂に送らうと云ふの御了簡、去りながら幼年の頃より住み馴れたる上田の城これを緣も因もなき者に渡すのは、誠に口惜しきことであるから弟と悴にしかるべく計はせ、而して此城を明渡したならば、眞田の家名に疵も附かず、また弟と悴の忠孝も立つであらうと

のお言葉にござります」これを聽いた伊豆守信之は信之「フーム左樣か、そのお父上のお言葉によもや虛僞はあるまいの若狹「何で御親子の間柄に僞りがござりませうや信之「然らば如何いたせは宜いと、お父上が御意あそばされた若狹「左ればでござります斯樣々々に仰せられましたから、宜しくお計ひあそばされたくさすれば忠孝の兩道が立つでござりませう」と云はれて伊豆守と隱岐守は互ひに顏を見合せまして信之「ム、成程、親人なり弟の兩名は事を起すも敏速なれば、また事を治むるのも敏速であ る、到底我々の及ぶ所ではない、宜い〳〵、然らば早々取計ふから、其方は立去れい若狹「然らば左樣にお計ひを願ひまする」とこゝに別府若狹は約束をいたして歸りました、かくて伊豆守信之は隱岐守信尹と共に、早速準備をいたし、秀忠殿のお目通りへ出ますと秀忠「兩名の者、何事ぢや信之「恐れながら申し上げます、彼れ昌幸、幸村は上田に堅く籠城をいたして居りますか

ら、なか〳〵容易に陷落るやうには思はれませぬ、かゝる小城を攻め落さんと、何時までも空しく日を費して居りましては、關ケ原の御合戰に間に合はず、それが爲に御父君家康殿より御不興を被らるゝやうなことがあつてはなりませぬ、誠に殘念の至りでござりますから、我々兩名に鐵砲の役を仰せ附け下されたく、さすれば昌幸、幸村が、いかに追擊をせんといたしても我々が一寸も君のお後は逐はせませぬ、何卒お許しを願ひます秀忠殿は思はず涙を流し、秀忠「ム、、其方の忠義はよく存じて居る、思ひ切つて左樣に申して呉れたか、絲者同士の合戰はさせたくないが、夫程までに申して呉れることならば、其方等に森右近大夫を差添へて鐵砲の役を申し附くるであらう信之「有難き仕合せにござります忠秀「われは關ケ原へ赴かん」と秀忠殿は速に御承知に相成り、その翌日陣拂ひの準備に及ばれまする、そこで伊豆守、隱岐守の兩勢は合體をいたし、上田城に向つて合

戰を仕掛けました、然るに城内では昌幸が命令を下しまして、鐵砲には強彈薬を入れるな、矢は矢尻を拔いてしまひ、餘り怪我人を拵へるな、穩な合戰をせよと云ふので、鐵砲などは成るべく撃たないやうにする、誠に穩な合戰でございます、城内の兵士は追手門を開き、ドッと進み出でゝ暫らく寄手の軍勢と戰ひましたが、忽ち伊豆守、隱岐守の采配に敵し兼ねましたか、ドン〳〵城内へ逃げ込みまする、之れを御覽になつた秀忠殿は御安心をあそばされ、關ヶ原を指して乘出されました、あとは父子共謀の仕事ですから、どんなことでも出來るに相違ない、此方は秀忠殿が關ヶ原へ到着されますと、もう關ヶ原の合戰に濟んだ後でございまして、家康殿は早や京都へ上洛をして居らつしやる、因て秀忠殿も京都へ乘り込まれ、御父君家康殿に御對面と相成り、このたびの眞田信之、同信尹の働作を具に申し述べられますと、これを聽かれた家康殿は大いに感心をあそば

されました、そのうちに眞田伊豆守、同隱岐守の兩名が、關ヶ原の合戰は大阪方が滅びたと聞いたから、早々京都へ乘り込んで參りまして、家康殿、秀忠殿のお目通りを致しました、すると、家康殿は悦ばれまして家康「信之、信尹、このたび上田にての行働、適れに存ずるぞヨ、恩賞は充分に取らせるであらう信之」ハヽッ、有難き仕合せにござります、就きましては更めてお願がござりまする、親昌幸、弟幸村が上田に籠城をいたし、德川へ抵抗を仕りましたる段は重々恐れ入り奉ります、因てこれより私共が上田城へ乘り込み、昌幸、幸村の兩名に理解を說き、速かに城を開かせまして、上田を立退かせる心得にござりますれば、何卒格別の思召を以ちまして、彼等兩名に助命の御沙汰を願ひ幸ります」と思ひ切つて申し述べました、これをお聽きになつた家康殿は、ホロリと涙を流されまして家康「アヽ實にや一族の爲を思ふ適れなる其方共かな、昌幸、幸村の兩名も强ち

不忠ではない、豊臣に忠義を立てんが爲に籠城をいたしたのであるから、予は決して憎いとは思はぬ、然らば其方共の望に任し、兩名の者には助命を申し附け、更めて上田城は其方共へ遣して三万石を與ふるであらう、左樣心得い」と本領安堵三万石の御墨附を下さいました。

守信尹は、お禮を申し上げまして、御前を退り、早速右のお墨附を懐中にいたし、信州上田へ引返し、城内へ乘り込みまして久し振りに父子伸父甥の對面、先立つものは涙ばかり、昌幸は快く酒宴を開きまして昌幸「さて信之、信尹、我申したことを用ひて、速に徳川へ左樣に計ひ呉れたる段、大儀に存ずる信之、お父上、御殘念でもございませうが、暫らく閑靜なる所へお引取りに相成り、氣樂にお暮しを願ひます、其中に徳川殿の御前を取計ひ、再び世にお出ましあそばすやうに仕りますから、何卒其時まで御辛抱を願ひます　昌幸「イヤ、最早合戰といふ合戰は仕

盡したから、これよりは山間に閑居をなし、風月を樂み、世を安樂に送りたい、幸村も其通りである、さながら其方等は眞田の家を大切にいたし、末〳〵榮を見せて呉れ、兩人「有難き仕合せにござります」と茲におの〳〵別れの交盃を致しました

このとき家來の者は何となう萎れてしまひ、涙を流しまして、昨日までは信州上田の城主として持囃された御方も、早や今日は此城を出なければならぬか、我々も亦君と共に此城を見捨てなければならぬとは誠に殘念至極である、昨日の榮は今日の溜と變り果てる我等が身の上を、男泣きに泣を揚ぐる者もありまして中にも由利鎌之助は思はず聲を揚げ鎌之「我君、只今のお言葉でござりまするが、我々は今更何ぞ此城を離れられませう、恐れながらいま暫らく此城にお留まりを願ひます　昌幸「コリヤ鎌之助鎌之「ハイ　昌幸「其方の申す所は誠に悦ばしいが、今予がいふ通り、最早當城に望はない、聽てまた花咲く時もあるおやらう

から、兎に角我申すことを聽いて呉れゝ」と云はれますと、錄之助も據所なく差俯向いてしまひました、さてみな盃の取交しも濟みまして、いよ〳〵袂別と云ふことに相成りますと、こゝに左衛門佐幸村は「お父上、何所までもお落延びあそばします昌幸されば我れは紀伊國高野山一心谷の蓮華乘院には、至つて懇意の間柄でもあるから、これより彼の寺へ參り、その近邊に住居をいたすの心得ぢや、幸村「御意にござりますか昌幸「然らば一同の者、最早分袂れるぞヨ」と遂に昌幸は一同の者に別れを告けました、このとき紀州へ供をして參ることになりましたのは、穴山小助安治を首めといたし、近藤無手之助友幸、眞田彌十郎定國、同彌太郎定俊、別府若狹昌秀、海野六郎利三、穴山新兵衛寛宣、筧金六宗丘、相木森之助政輝、堀田九郎正金、同荒次郎友重、同虎之助定九、三好新左衛門入道清海、同新兵衛入道為三、酒柳八九郎清延、明石又七郎信舟、由利鎌之助基幸、三

輪琴之助友一、木辻別右衛門國重、根津甚兵衛秀盛、笠川八內盛俊、野呂兵部久政、赤坂式部、猪口半兵衛、月方兵馬、依田兵部、別府虎之助、小宮山數馬、松崎藤兵衛、德島藤馬、明石民部入道善然、淺香鄉右衛門等都合二百七十五名、其他の者は散々亂々になつたのでございます、さて昌幸は右の家來を從れまして、いま上田城の追手門を開いて立出でましたが、思はず足を停めて回首り、城の櫓を眺めまして昌幸「ア、幸村、長らく間起臥いたしたる此城も、最早見納めであるぞヨ幸村「お父上是非に及ばぬことでござりまする」と互ひに涙を流しながら、一同住馴れました上田の城を後になし、日を重ねまして、道中無事に紀州高野山へ參り、一心谷の蓮華乘院へ來ると、昌幸は院主とは懇意の間柄でございますから、此仁に話をいたし、蓮華乘院の周旋に據りまして、九度山村と云ふ所の地所を買求め此地へ屋敷を建つることになりました、同じ浪人で、深編笠を

冠り、高砂やこの浦船と謡ひながら、一扇子を叩いて合力を乞ふ浪人もありますが、一眞田の浪人なぞは金も澤山あるので、一寧に立派なものでございます、何しろ大名の浪人でございまして、眞田伊豆守、同隠岐守の方から充分に手當が參ります、かくて立派な屋敷を築へまして、遂にこれへ這入り込みましたが我家には穴山小助、別府若狹、由利鎌之助、淺香鄉右衛門、小宮山數馬、松崎藤兵衛の六人を置き、其余は百姓或は商人に風姿を偽し、一みな別れ〳〵になつて、世の中の形勢を窺ひ、一朝事ある日には忽ち御主人のお手許へ集まらうと云ふ、一實に是等が忠臣二君に仕へすと云ふ眞の武士でございます、さて昌幸、幸村の兩名は、別に何もすることがございません、たゞ秀頼公の十五歳に成られた時に、關東と大阪の手切を見るばかりの用でございますから、暇に任せまして、幸村は糸を持つて參り、一ポッ〳〵内職に紐を編み始め、これを家來の者に持たせまして

町へ賣りに出されましたが、これが現今に存りまする、眞田紐の濫觴でございます、眞田が案出したから眞田紐と云ふので、一實に何うも丈夫な物でございます、一寸内職をしても、此邊の仁のすることとは違ふものでございます、直ぐにその名前が附いて遣ります そのうちに幸村の妻波江は病氣の床に打臥しましたが、到頭大助といふ一人の可愛い忰を殘しまして、氣の毒にも冥土の客となりましたので、一同涙ながらに野邊の葬送を濟ませましたが其後昌幸、幸村の父子は、一人目に着かぬやうに裏の庭へ城の形のやうな物を拵へ、追手から人數が廻つて來たときには、斯うして防ぐなぞゝ云ふ、合戰のときの籠城或は攻方の工夫を練つて居りました、これぞ大阪名城の型を取つたものでございまして、幸村がこれを防ぐと云ふが如く、不斷こんなことを行つて居りましたから、北後慶元の合戰のときには、何うしても關東の同勢が大阪城を攻め落すこと

が出來なかつた。それもその筈です日々稽古が積んで居りまする、然るに波江が亡くなりました、その翌年、頃は慶長十一年の春、昌幸は不圖風邪の心地と打臥しましたが、何分老体のことでありますから、おひ〳〵衰弱をいたし、病氣は漸次に重るばかり、之れによつて幸村は殊の外心配をいたし、種々に手を盡して介抱いたしましたが、醫藥の効驗更になく、流石剛勇の昌幸も、いまは息さへ絶々になるくらゐですから、自分もこれは到底不可ないと思ひましたか、幸村と大助を枕頭へ呼びまして、苦しき息を吻と吐き昌幸「悴殘念な次第ぢやわい、秀頼殿は最早十四歳に成られたから、いま一二年生存へるならば、關東と大阪の手切の合戰を見るであらう、其時には思ふ存分の勇戰をなし、今一度徳川を撃つて、潔く冥土へ參りたいと思ふたが命は天なり、致方がない、いま死するは殘念至極なれども、是非に及ばぬ、其方は我志を受繼いで、この大助を守育て、必ず

徳川の天下を覆へし呉れヨ、臨終の際に申し遺すのはこればかりであるぞヨ」と凹んだ兩眼より涙を流して申し述べました、これを承はつた幸村は幸村「ハヽッ、これお父上、固より其邊は充分に覺悟をいたして居りまする、去りながらお氣を丈夫にお持ち下されて、いま一度御全快をあそばしまするやう」と聽いて首を振つた昌幸が昌幸「不可ぬ〳〵、予は最早命數の盡きぬることを知つたわい、われ死なば必ず法體にいたさず、甲冑を被せ、兵仗を持たせ、紀の川へ沈に懸けて呉れヨ、關東の滅ぶるを見るまで成佛はいたさぬ」と飽迄豊臣の天下を思ふ忠義の一言、幸村は涙を流して差俯向きました、すると昌幸は大助を見まして昌幸「ヤヨ大助、只今この祖父の申した通りであるから、其方も迪れの勇士と相成り、必ず徳川を討つて、其名を後の世に殘して呉れヨ、其方の行働を見ずに死するは殘念ぢやわい」と悴と孫を見返りました昌幸は、この遺言が現在の別れでござ

いましたか、武田家の大忠臣、なほ又豊臣に仕へて忠義を盡しましたる名士安房守昌幸も、到頭六十七歳を一期といたし、そのまゝ睡るがごとくに往生を遂げましたが、實に惜しいものでございます、流石の幸村も、ッッとばかりに其場へ泣き倒れ、暫時の間歎き悲んで居りましたが、今更歎いて返らぬことでありますから是非もなく〳〵遺言に從ひまして、その遺骸に鎧兜を被せ、仗を突かせ、これを石の唐櫃へ入れ、紀の川へ沈に懸けましたが、なか〳〵立派な葬り法でございます、併しこの水葬は内々のことでありまして、表面は昌幸の衣類だけを棺に入れ、立派に葬式は營みましたので、法諡をば正譽干雪居士と號しますと、かくて幸村は僅かの間に女房と親に死別れましたから、ハッと氣が逆上ましたか、宛然阿呆のごとくになり、俗に云ふ健忘と云ふ痛氣を患ひました、併しこれは關東方へ油斷をさせんが爲の計略でございまして、これから關東に居ります

る徳川家康と、紀州に居りまする幸村とが、器量較べに懸りまするとと云ふのお談、一寸一息吐きます。

第八席

關東の徳川家康と申しまする仁が、豊臣の天下をば我物にいたさうといふのは、昨日や今日の考ではございません、また驚くなられた秀吉殿も、徳川がおれの天下を奪るわいと云ふことは能く知つて居られたので、何うせ奪られるものならば、これは預けて置かうと思つて預けられたのであります、併し父子の情愛と致しまして、忰秀頼を守立つる者は、眞田、片桐しかないと思はれたから、眞田、片桐に後の事を托されたのでございますが、この秀吉といふお方は、御存命中に甚しい奢侈をいたされました、餘り奢侈をいたされるから、千の利休といふ人が、何うもかる奢りなさるやうでは、豊臣の天下は長く持たぬわい

と考へました、奢る平家久しからずといふこともありますが我日本に於ける奢侈の隊長は御堂關白道長と、羽柴秀吉であると云つて居るくらゐであります、また朝公富士の巻狩、平清盛兵庫の築島、及び太閤秀吉醍醐の花見、これを以て日本の三大層と云つて居ります、すが、實に秀吉殿が參內をあそばすときに、千の利休は賢い人ですから、口で異見をするよりも、それとなく異見をしやうと『奢る者久しからず』といふ立札を致しました、これは御簾の中から御覽になつた秀吉殿、秀吉「あの札を此所へ持ていい」お側の衆が札を取つて差出しますと、秀吉殿は直ぐに裏を返し『奢らすとても久しからず』と書かれました、これを考へて見ると、秀吉殿は大層なものでございまして　おれは德川といふ氣味の惡い奴が側に附いて居るから、假令奢らぬでも矢張り一代しか持たないのだ、何うせ持たないものならば、一番奢侈に耽り、秀吉殿はかういふ勢のものであつたといふことを後の世にまで傳へんといふの御了簡、千の利休とはまた一段上でございました、何故秀吉殿は德川がおのれの天下をば奪るといふことを看破かれたかといふと、家康といふ仁の耐忍力に驚かれたのでございます、元來秀吉殿は子供の自分から針はやの望が棒はやに叶つたので、實に豪氣なものでございますが、それが髮の毛はやも遠水道の鐵管はやに思つてするのですが、我々は何事もできません、然るに秀吉殿はドン〳〵拍子に出世をされた仁で、どんなことでも一旦かうと思つたことは、みなその望が叶ひました、その初め零落つたときには、食乞をして居りましたが、一度成上つたときには、從一位關白太政大臣とまでなられました、能くそんなに昇れたものです、また秀吉殿が子供の自分に孤を冠り參州矢矧橋に寢て居りますと　侍「エ、下に居らう〳〵」といふ聲がしたかと思ふと、バラ〳〵ッと駈けて參りました一

人の侍　侍「コレ〳〵非人、起きろ、非人、起きぬか〳〵」とド
ン〳〵橋板を足で叩きました、偶爾と目を覺した日吉丸が　日吉「
ア、好い心持に寢て居たのに、拙者を起したのは誰ぢや　侍「非
人、起きろ〳〵、先刻から幾度も云つてるが聽ねないのか　日吉「
ハイ、聽ねぬことはございませぬ、耳へ這入つて居りますが、
拙者は非人ではございません　侍「其方は非人ぢやアないか　日吉「
非人とは文字に書いて人に非ず、身に錦を纏うて居りましても
心が人でなしであるならば、これぞ人非人と申しますが、拙者
は人々から食を貰ひ、野臥をいたして居りまする野臥乞食でご
ざいます、イヤ相當な年を老つたお方にも似合ぬ粗相な言語、
お氣の毒なものでございます、ハヽヽヽ　侍「イヤこの小悴は小
利口くれたことをいふ奴だ、非人でも乞食でも宜いわい、只今
若君樣のお通りであるから、そんな所に寢て居ては無禮だ、チ
ヤンと坐つてお辭儀をして居ろ、尋常ならばお目觸りであるか

ら、追拂つてしまふのだが、マア頭を低げて居ろ　日吉「ハイ、ア
ヽ、天下は拙者のものだと思つて、參州矢矧橋を寢所にして居た
が、その拙者に頭を低げさせる奴があるか、アヽ時は浮世、仕
方がないわい」と不精無性に起き上り、橋板に兩手を突きなが
ら、沈と頭を低げて居りますと、下に〳〵と云ひながら、今や
自分の前を通りまするお駕籠、垂が上つてありますから、拙者
に頭を低げさせるのはどんな奴であらうと、何氣なく偶爾と顏
を擡げ、覗いて見ますると、まだ漸う九ッか十にもなつたかと
思はるゝやうな子供でございまして、お乳母さんの膝に縋れな
がら、前には人形などが飾つてある、そいつを面白げに見て居
りまするは、これなん參州岡崎の城主德川參河守廣忠といふ人
の御子息、竹千代君にございます、即ちこれが後の家康殿まだ
竹千代君と云はれた時分でございました、これを見た日吉丸は
日吉「ハヽア、これは岡崎の德川の悴だナ、能くも拙者に頭を低

げさせた、彼れは人間である、われもまた同じ天が下に發生た者、今は頭を低げると雖も、今に見ろ、此奴に拙者の履物を直させてやらぬで措くべきか、竹千代、覺えて居れよ」とこのとき初めて決心を致しました、能くそんな野方圖な決心をしたものです、乞食の分際をしながら、大名に履物を直させやうといふのは、無法とも狂人とも言ひ樣のない考でございます、然るにこの日吉丸が織田信長公に仕へてより、鰻上りに世出をいたし、天正十三年九月に相成りましては、從一位關白太政大臣豐臣秀吉といふ官に昇りました、このとき德川竹千代君は德川內大臣家康と成つて居られます、ところが秀吉殿は關白にまで昇進をいたし、もう思ひ置くことは更にないといふやうになると偶爾と胸に泛んだのは秀吉「さう〳〵まだわしの望が一ッ叶つて居ない、わしが參州矢矧の橋で乞食をして居た時分に、德川といふ奴に履物を直させてやらうと思つたことがある、今では彼

れも內大田、さう容易くは參らぬわい、と云つて此儘過すのも殘念だ、ヨシ、一番おれの履物を直させてやらう」と考へて居りました、すると伏見の大地震の後に秀吉殿は家康殿と共に參內をいたし、天機を拜し奉つり、奏聞を遂ぐる義がありますから、お兩人揃つてお昇りに相成りまする、その途中お兩人共輦に乘り、多勢の家來が四邊を取り卷いて居ります、このとき德川は豐臣の客大名でございまして、外面は誠に仲睦く交際つて居りますが、德川の家來に於いては、この時分から豐臣の天下は面白くないと思ひながら、外部は綺麗に裝して居ります、なれども腹の中は何とこう解けて居ない、豐臣の家來もまた德川といふ奴は面白くないと思ひまして、これも腹が解けて居りません、双方とも供をしながら睨み合ひ、德川の方では上方のヨロ〳〵侍、今日はかうして從つて居るが、今に見ろ、一朝事が起つたならば目に物見せてやるぞよと思つて居りますと、ま

た豊臣の方では、何だ、參河の萬歳侍め、今に事が起つて見ろ一泡吹かしてやるぞよと、この時分から双方の氣が投合ませんさていよ〳〵御所へ參りますと、みな家來を攘つてしまひ、關白秀吉は位官相當の裝束、家康もまたその通り、手に笏を携へ足に沓を穿き、コローン〳〵と揃つて昇りまする、彼の笏と申しまするものは、自分の心が斯くの通り眞直であるといふ意を表はしヒタリと眞直に胸へ當てなければならぬ、決して曲げて持つべきものではございません、百人一首の書などを見ると、笏を曲げて持つて居る奴がありますが、あいつは心が曲つて居るに相違ございません、この笏は美濃の山から出る一位木といふもので造るさうでありますが、生れながらにして一位といふ位が附いて居る、又何の爲にそんなものを持つかといふと、自分の心の眞直なることを表はすばかりでなく、裝束の後方にダラリと下つた物がある、これは宛然だらしもない女が帶を解い

たやうですが、階段を登つたりするときに、之れを踏んではなりませぬから、一寸笏でかう取り上げる、總うじて此所では手を觸ることが出來ませぬ、また緞帳などが下りてあつたりすると、笏を以てかう捲り上げる、脊面の痒いときには首筋から突ッ込んで掻く、それは何うか分りませぬが、兎に角平生は胸へヒタリと當てゝ持つて居るものです、さてお兩人は御所へ昇つて參りました、このとき秀吉殿は此所で一番沓を取らせてやらうと考へたから、先きに立つて歩きながら、沓を脱がうと致しましたが、チヤンと脱げぬやうに穿いて居るから、脱がうと思つても脱げません、頻りにかう左の足を振りながら、沈と立佇まつて居りますと、家康殿は後方からこれを見て、何だらうと思つて居るうちに、漸う脱げて來ると、秀吉殿はポーンと沓を向ふへ投げ出だし秀吉「德川、沓を〳〵」と二言云ひました、家康殿はこれを聽いて思はず憤然といたし、不埒千万な秀吉、汝

今は從一位關白かは存せぬが、われまた內大臣たり、匹夫成上りの分際をしながら、この家康に沓を取らさんとは何事ぞと一刀の柄に手を掛けやうと致しましたが、其点は天下を治むる仁だけありまして、イヤ〳〵さうではない、身分は匹夫の成上りでも、この秀吉といふ者は凡人ではない、今この者に抵抗ふときには天下の爲にならぬ、その代りこの秀吉が死んだならば、おれが天下を奪つてやるぞよ、此所は辛抱をいたし、沓を取つてやらうと思つたから、笏を首筋に差し、嬰束の間から手を出だし、沓を取つて秀吉殿に穿かせました、秀吉殿は何も云はずたゞ咳拂ひをいたし、コローン〳〵と歩き出しましたが、また偶爾と立ち佇まり、此度は右の方の足を振り始めた、こいつを眺めた家康殿は、また始まつたぞ、困つたことだわいと見て居ると、ポーンと靴を放り出し秀吉「家康、靴を〳〵」と云ひました、家康殿はこれを聽いて、能くもそんな野方圖なことが云へ

たものだ、そんなに沓が脱げるやうならば、長沓でも穿いて來るが宜いと、心の中に怒りましたが、マア此所は辛抱をして置かうと、再び氣を取り直し、沓を拾つて穿かせました、このとき秀吉殿は、ア、徳川といふ奴は怖い奴だ、おれの生きて居る中は何もしなかちうが、おれが死んだならば、此奴が我天下を奪るわいと早くも看破かれました、かくて參內をいたし、龍顏を拜し奉つり、奏聞を遂げまして、聚樂の御殿へ退りますと、秀吉といふ仁は外面は嚴然として居られますが、裏面へ這入りますと、誠に打ち解けた言語をするお方です、早速家康殿を呼びまして秀吉「さて家康殿、今日は誠に失禮をいたした、さぞお腹が立つたであらう、秀吉といふ者は禮義を知らぬ奴だ、兎に角內大臣に成つた者に沓を取らせるとは不埒千萬であるとお思ひなすつたであらうが、どうか免して呉れられ、實は一旦手前の望んだことは何所までも叶へなければ、腹の虫が得心をし

ないからナ　家康「ハイ　秀吉「尊公がまだ九歳ぐらゐの時分、手前が
蓼洲矢矧橋の上で、菰を冠つて乞食をいたして居つた」家康殿
も驚きまして　家康「オヤ〳〵　難儀をした人とは聞いて居るが、ま
さか乞食までしたとは思はなかつた　秀吉「そのとき其許に地上へ
手を突いて頭を低げたが、どうか自分も一番出世をして、其許
に沓を取らせたい、履物を直させたいと思つて居りました、な
れどもつい合戰に取り紛れて、今日までさういふ間がなかつた
が、今日はわが念が徹り、其許に沓を取つて貰ひました、誠に
何うも相濟まぬ、併し其許に斯樣なことをば無報酬は頼まぬ、
一度の沓をば二万石といたし、二度取つて貰つたから、四万石
を進せませう」と云ひましたが、内大臣家康などが沓を取ると
大變な下足代が貰へるもので、苟且にも四万石の下足代とは驚
いたものでござります、寄席の下足代はたつた五厘、大きな違
ひもあるものです、このとき秀吉殿は　秀吉「さて家康殿、其許に

見せて置きたいのは大阪城の繪圖面である、今に何處か大阪の
城を攻めんとする者があるかも知れないから、この繪圖面を見
て置いて下さるやうと、かう前へ開げました、このとき家康殿
は思はずブル〳〵と顫へ上り　家康「アヽこの秀吉は恐ろしいもの
だ、われが豐臣の天下を墾むといふことを早くも察り、自から
大阪城の繪圖面を見せるのだナ」と驚かれました、一方は我日
本開けてより以來未だこんな仁はないといふ名智の秀吉、一方
は十五代の天下を造つた家康、かういふ賢い仁同士のすること
は違ひます、右の繪圖面を見せる仁も豪ければ、その眞意を察
つた所の家康も豪い、もうこのときから双方の心の中がチヤン
と決つて居るのです、斯樣な譯合でございまして、又これを看
破いて居る眞田父子でありますから、秀頼殿が十五歳に相成ら
れても、徳川が豐臣に天下を渡さぬことは無論承知の上でござ
います、これに依つて家康殿は眞田幸村が怖いのでございまし

て、此奴を生かして置いてはならぬ、彼れが紀州九度山村へ參つた上は、若しもわれと大阪とが手切に相成つたならば、必ず大阪へ味方をする奴であると、少しも心に油斷がなく、豫て紀州和歌山の城主淺野但馬守長晃に向ひまして、幸村の動靜を篤と見屆けよといふ內命を下しました、依つて淺野但馬守は不斷幸村の擧動に眼を注けて居りますと、この頃は僅かの間に女房と父親とに死別れた故か、幸村は茫然としながら、馬に乘つて其邊を歩き廻り、ポカーンと腐つた蛤のやうに口を開け、その言語は阿呆のごとく、音調子までも變つて參り、今云つたことをば今忘れるといふ健忘といふ病になりました、また毎日のやうに高野山へ經文の稽古に行くのだと云つて獨り馬に乘りながら高野山を指して參りまするが、經文の稽古などゝは眞赤な嘘僞總じて物事は死ぬまでが修業でございまして高野山に上杉の大軍師字佐美駿河守が登山をいたし、今では坊主になつて居りま

すから、この方へ軍學の問答に參りまするが、これは誰あつて知る者がございません、百姓が途中で幸村に出遇ふと　○「眞田樣、何方へお出でゞございますナ　幸村「お山へお經文の稽古に參ります」と涎を流して答へますと、百姓も驚いて　△「オイ可哀想なものだナ、信州の上田の城に楯籠り、日本一の智者と云はれた眞田樣も、一時に女房、親に死別れたから、あの通りの健忘を患ひ、到頭阿呆になつたわい」と取り〴〵の噂にござります、かくて幸村は性の大助を充分に教育しやうともしない、また大助は自から川へ飛び込むかと思ふと、山へ分入つて木登りをする、或は犬を追ひ廻すといふ、實に何うも腕白で仕樣がない、父子とも能くあんな馬鹿が揃つたものだと、誰一人も僞の阿呆と氣注く者がございません、何が難かしいと云つても、飛び切つた怜悧な人が阿呆の眞似をするほど難かしいものはございません、薄馬鹿が小利口な眞似をすることは澤山ありますが

なか〳〵賢い人の阿呆は出來ないものです、こゝに淺野但馬守は何程幸村の動靜を見ても、何うも阿呆としか思はれないから大きに安心をいたし、その翌年江戸表へ參り、家康殿の御前へ出ますと　家康「但馬、九度山村の幸村は何ういふ樣子であるか、但馬「御意にござります、何うも油斷がならぬと思ひましたから家來の者に吩咐けまして、その動靜を窺はせましたる所、イヤハヤ以ての外の次第、親と妻とに死別れまして、健忘といふ病を患ひ、全然何うも取るに足らぬ阿呆になつてしまひましたから、決して御心配には及びませぬ」これを聞いた家康殿は　家康「ヱッ、然らば阿呆になつて居るか　但馬「ハイ」思はずブル〳〵と身を顫はし　家康「ア、恐ろしや〳〵……但馬　但馬「ハヽヽ、家康「其方は幸村を實際の阿呆だと思つて居るか、まだ其方は年が若いわい、其方の目から見やうが、誰の目から見やうが、實際阿呆としか思へまい、それが恐ろしいので、此方が阿呆にされて居

るのぢやわい　但馬「ヘーッ　家康「實に恐ろしい奴は眞田幸村である何うしても生かして置けない、但馬、更めて申付くるが、其方の家來に幸村を討たうといふだけの士はないか　但馬「左樣にござります、手前の家來に大言ではございますが、南海道比類なき士にいたして、忍術の名人山本九兵衛時經といふ者がございます　家康「ふゝ、然らば其者に申付けて、今の間に幸村を討ち取らせるやうに取り計らへ　但馬「承知を仕りました　家康「油斷をいたすな、確と申付けたぞ　但馬「ハヽアー」と但馬守はお受けを致しましたがこの幸村の阿呆をば阿呆と思はず、なほ油斷をしないと云ふのは、家康も喰へぬ人物でございます、かくて淺野但馬守は紀州和歌山へ立歸りましたが、その家來山本九兵衛時經と云ひまする者は、伊賀流の忍術の名人、劍道は古今無双の達練家南海道では並びなき士でございまして、祿高二千石を頂戴いたして居りまする、その九兵衛時經を呼んだ但馬守長晃が、眞田

幸村をば討ち取るやうと内命を下しまする、時程は承知をいたし、早速九度山村なる幸村の屋敷へ乗り込みまするといふ、覚姫何様なことに相成りまするか、次のお楽しみと致します。

第九席

さても浅野但馬守長晃は和歌山の本城へ立ち帰りまして、早速山本九兵衛時経を呼びました、九兵衛は何事ならんと早々お目通りを致しまして九兵君には道中なんのお触りもなく、無事に御帰城と相成り、恐悦を申し上げ挙つります但馬「九兵衛、其方を呼び出だしたのは餘の儀に非ず、其方ならでは勤まらぬ大役があるのぢや、これも天下の為であるから、身命を抛つて勤めて呉れよ九兵「こは容易ならぬお言葉にござります、しては命を抛つて御奉公をいたすの所存、決して一命を惜みは致しませぬ、如何なる御用なるか、何卒仰せ聴けを願ひます、

但馬「左様か、能く申して呉れた、実は関東大御所よりの内命であるが、真田幸村は九度山村に在り、偽の阿呆となつて居るから、決してこれを生かして置くことは相成らぬ、何者かに吩咐けて討ち取れよとの御意であるから、其方が真田の首を討つてこの長晃に見せて呉れよ、左すれば関東へ幸村の首を差送り、此方の手柄にいたすでござりまするが、実際の阿呆なれば討ち易い、なれども偽の阿呆とあるならば、なか〳〵以て難かしきことにござりますが、君命なれば命に換へて勤めませう、併し首尾よく討てますれば これに越したことはござりませぬが、若しも討ち損じましたならば、先方で斬殺されるかも知れませぬ、ことに據れば今生の御対面もこれ限り、その辺は御承知置を願ひます但馬「フーム、左様か、いかにも其方のいふ通り、若しも討ち損じたならば、よもや幸村が其方を生かしては置くまい、然らば別れの酒盃を

いたさう　九兵「ハヽッ」　これより但馬守は銚子盃を持ち運ばせまして、別れの交盃をいたし　但馬「九兵衛、必ず仕損ひをいたさぬやう、幸村の首を討つて來いよ、これを取らせるであらう、これは予が秘藏の一刀、中身は金剛兵衛盛高である　九兵「有難き仕合せにござります、然らばこの一刀にて幸村の首を討つて參りませう」と茲に九兵衛は但馬守に別れを告げまして、一先づわが屋敷へ歸り、これから忍術の準備に取り掛りまする、この忍術と云ひまするものはその頃盛んに行はれました、尤も戰場では入用でございます、眞田幸村でも始終忍術使を利用ました、千台萩の芝居を見ますと、仁木彈正が鼠になつて出ますが、決して人間が鼠になれる道理はございません、これは蝶形變、鼠形變と云つて、我身をば鼠の姿に消すのではない、實際の鼠や蝶を機關に使ふのでございます、二本の指を握つて我身を消してしまうなどゝ、なか〳〵さう巧くは參りません、二本の指を

握つて身体が消えるやうならば、鮓屋の職人さんは身体が消え通しにならなければなりませぬが、そんな輕々しいものではございません、さて充分に準備を致しました九兵衛時經が、その夜のうちに九度山村へ參り、眞田の屋敷へ忍び込みまして、幸村の居室と覺しき所を懷なく搜しましたが、何しろ廣い屋敷のことでありますから、何所に幸村が居るか分りません、流石の九兵衛も困り果て、其方の居室を開け、此方の居室を開け、いろ〳〵搜し歩いたが分らない　九兵「ハテ訝しいぞ、成程僞の阿呆に違ひない、我屋敷に皆目居ないとは不思議だ、これは合点が行かぬ」と思ひながら、庭前へ出まして、偶爾と向ふを見ると庭の中央に納屋のやうな誠に粗末な家が一軒ある、その戸の隙間から燈火が映して居るから　九兵「ハヽア、彼所が怪しいわい」と九兵衛はソッと近づいて參り、戸の隙間から覗いて見て、思はずハッと驚いた、それもその筈でございます、家内では燈火

を點した幸村が、幾重にも紙を張りまして、これに澁を塗り、貼抜の大筒を拵へて居るのであります、その側には悴の大助が机に向ひ、何か本を開げまして、頻りにこれを讀んで居ります る、流石の九兵衛も驚いて、少時の間茫然といたし 九兵「成程、家康といふお方は豪い仁だ、僞の阿呆と看破かれたが、ホンにその通りだわい、大助の見て居る本は何だらう、オヤ〳〵六韜三略を繙いて居る、これは恐ろしい小悴だ、此上は最早助けることは出來ない」と一刀の中柄に手を掛け、準備を仕直しまする、幸村は頻りに貼抜を張つて居りましたが、偶爾と点つてある燈火を見て、思はずフワ〳〵〳〵と笑ひ出し 幸村「悴々、大助「ハイ 幸村「曲者が忍び込んだぞ」と低聲で云はれたときに、大助が尋常の小悴であつたならば 大助「エーッ、曲者が這入りましたか」といつて騷ぐのですが、流石は後年に其名を揚げやうといふ大助、少しも騷ぎません 大助「ハイ、左樣でございますか」

と莞爾笑を含みましたが、能く父子とも大膽な者が揃つたものです、そのうちに九兵衛は居室へ忍び入り、今や幸村の脊後へ密と廻りまする途端に 幸村「曲者めッ」と云ひながら偶爾と回首つた幸村が、ハッタと九兵衛を睨み付けました、日本隨一の大軍師に睨まれた九兵衛は、その身体は忍術を以て消してありますが、ガタ〳〵と顫へを生じ、思はずヨロ〳〵と蹌踉いた實に何うも權式といふものは恐ろしいもので、九兵衛はハッと驚いて蹌踉きまする途端に、忍術が破れたから、ホイ失策つたと一刀を取り直さうとする、このとき大助は九兵衛の姿が見えたから 大助「曲者ッ」と跳り込みさま脊後から、ヤッと云つて撃ち込んだ 九兵「最早このうへは致方がない、この小童めッ」と九兵衛は一刀を取り直し、後ろ樣に颯と斬らうと致しましたが、大助はムンヅと組付きながら、体を捻り、ヤッと一聲懸けるや否や筋斗を打たせまして、ズドーンと九兵衛を投げ附けた、南海道

一の勇士も、僅か十四五歳の子供の爲に筋斗打つて轉倒り九兵「ウワーッ、殘念ッ」といふやつを乘し蒐り、忽ち當人の下緒を解き、これを後ろ手に縛り上げました、その繩尻を取つた大助が大助「曲者めが、猪牙才千万な奴だ、お父上、御覽の通り曲者は生捕りましてござります幸村「ふゝ、大儀々々」と燈火を掻立てた幸村が幸村「其方は山本ではないか、イヤサ時經ならずや、九兵「ハイ、拙者を御存じでございますか幸村「大概其方がわれを殺しに來るぢやらうと思つて待つて居つたわい、關東の家康の内命に據り、淺野但馬守が其方に吩咐けて、われを討たさんといふことは、疾より相分つて居る、併し其方は長晃に對する忠義であるから、決して憎いとは思はぬ、サア繩を解いて遣はすから、速かに和歌山へ立ち歸り、但馬守に左樣申せい、左衛門佐幸村は油斷のならぬ奴で、貼拔の大筒を造り、悴は六韜三略を繙いて讀んで居ると、この有樣を具に申し述べよ、命は助けてやる、行けッ……大助、繩を解いてやれ大助「ハイ」と大助はバラリと繩を解いた、九兵衛は餘りのことに、ハッと頭を低げ九兵「アヽ恐れ入つた、われこれまで多勢の人に出會つたが、かゝる大器量人に會つたことがない、アイヤ左衛門佐殿、決して憎いとは思はぬといふ、その御一言が骨肉に徹み渡りました、いまさら歸れと仰せ下さるが、拙者が其許を討ち損じました以上は、阿容々々城内へ立ち歸り、何故主人に顔が合されませうや、速かに首討つて下さるやう幸村「コリヤ九兵衛、其方は淺野に對する忠義者、汝のやうな勇士の首を討つ劍は持たぬはい、九兵「ハヽッ、左樣云はれますれば是非に及びません、拙者はこの所において切腹をいたし、潔ぎよく相果てん、御免幸村「コリヤ待てッ、九兵衛、腹を切るのは短氣ぢやぞ、主家へは歸られず、生きて居られぬといふことであるならば、今より心を改めて、かくいふ幸村の家來と相成り、われ今に天下に事を起すか

ら、その節充分なる働作をいたし、天下に勇ましき名を揚げよ
左すればこの世に生れた、弓矢取る身の甲斐があるであらう、
固よりわれは天下を望んで事を起すに非ず、秀頼公十五歳に成
られたが、未だ徳川家康が天下を渡さない、それが爲に近頃大
阪においても、なか〳〵の騒動を極めて居る趣、今にわれを大
阪より迎ひに參るは必定、われ大阪へ乘り込みたらば、忽ち事
を擧げん心得なれば、何れに從いて名を殘すも同じことである
から、豊臣の天下の爲に働作をいたして呉れては何うぢや、九
兵衛、死するばかりが侍の道ではないぞよ」と日本一の軍師が
理解を説いて勸めました、すると頭を低げて居りました九兵衛
時經は九兵「ハヽッ、有難き仕合せにござります、その御理解は
道理千万、左樣なれば家來の中にお加へを願ひます、今日より
心を改めて御奉公を仕つりませう幸村「左樣か、然らば主從の交
盃をいたさん、悴、天下の勇士を家來といたし、芽出たいの、

大助「お芽出たう存じます」と云つて居りまする所へ、ドカ〳〵
と這入つて參りました穴山小助、由利鎌之助が兩手を突いて、
兩人「御主人、お芽出たう存じます、九兵衛は驚いて九兵「こんな
者が今まで何所に隱れて居つたのだらう、ア、恐ろしいのは幸
村である、げに神のやうな仁だわい」と思ひました、このとき
九兵衛は心から幸村に降參をしたので、その後大阪合戰の折柄
充分なる働作を致しました、かくて幸村は九兵衛を我手許に留
め置くことゝ相成りまする、然るに淺野但馬守は山本九兵衛を
九度山村へやつたが歸つて來ない但馬「さては可哀想に爲損じ、
眞田の爲に殺されたか、憫然なことをいたしたわい」と幸村に
降參をしたとは知らないから、家來に申付けまして、充分に九
兵衛の葬式を致させましたが、幸ひ九兵衛には妻子がございま
せぬから、二千石の食祿は自分の手許へ預つて置きました、疇
昔から生きて居る中に叮嚀に葬はれたのはこの人ばかりでござ

います、その後九兵衛が眞田へ降參をして居るといふことを聞いて、但馬守はイヤ怨つたの怒らないのではない、それは腹が立ちませう、サアかうなりますと世上が喧ましい、取早く秀頼殿が十五歳を過ぎて居られるのに、徳川が天下を渡しませぬから大阪より加藤肥後守藤原清正が、關東に向つて天下の催促を致しました、荷且にも天下の催促ですから、なか〳〵語が大きうございまして、我々が一圓の高利の催促を喰ふのとは違ひます、そこで徳川は清正があつてはならぬと思ひましたか、淀川八右衛門といふ者に申付けまして、饅頭の中へ毒を仕込み、これを清正に喰はせました、尤も淀川八右衛門は自分も毒饅頭へ喰べて而して清正に喰はせたので、なか〳〵徳川に對しては忠義者でございます、これに依つて韓國で鬼上官と云はれ、我朝に並び無き豪傑といはれた清正も、毒饅頭の計略に罠り、肥後國熊本へ引揚げ、我木像に向つて我髭を植ゑながら、遂に逝去

いたされましたが、明治の今日では清正公と崇められ、御主人の豊國大明神よりも御繁昌でございます、そのうちにまた家康殿は反間苦肉の計略を以て、秀頼殿の御母堂淀君を陥かし、片桐且元を徳川へ味方をする、悪人なりと云ひ觸らさせ、遂に攝州茨木の荘へ追返しましたでござります、尤も大阪城内には大野の美濃守入道道犬、その嫡男修理亮治長、織田源五郎長益入道有樂斎などゝいふ、無智無明の臆病者が揃つて居りまして、ヤレ老臣だとかいふやうな、エらさうな肩書を附けて、すべての事を計らふから爲損つたのでございます、万事を執り持つ片桐東市正且元に任して置けば宜いものを、なほ御母堂の淀君といふのは、その身は女性でありながら、天下の事に喙を容れました、誠に申し難いことですが、女の出過は不可ないもので、女賢うして牛疫損ふといふことがございます、されば大阪の城ばかりは外から落されたのではな

い、實際内から落したといふくらゐです、第一に大野道犬といふだうけん違ひの爺などが手傳つて潰したと云つても宜い、かういふ者ばかりかといふと爾うではない、木村長門守重成、薄田隼人正兼相などゝいふ豪傑も多勢揃つて居りましたが、かういふ士の意見が行はれなかつたのは、誠に殘念の至りでございます、ところがいよ〳〵徳川は天下を渡さぬと決りましたから大阪は徳川を敵手にいたし、有無の一戰をしなければならぬといふ場合になりましたこれに依つて軍師たるべき者が入用でありますから、この時分に以前黒田勘解由次官孝高の家來でありましたが、當時は主人甲斐守長政と仲が悪いから、主を見限つて浪人をして居りまする、後藤又兵衛基次といふ豪傑、これは泉州堺に住んで居りましたが、これを呼び迎へて入城させました、また京都に居りました長曾我部宮内小輔秦盛親、當時頭髪を丸めまして、その名を幽夢齋と改めて居りまする、これは大

變に強い爺さんです、これも入滅をする加藤左馬之助嘉明の臣塙團右衛門直行も入城をいたし、その勢十三万餘騎と相成りました、併し後藤又兵衛は一同の將に向ひまして又兵「何うも拙者ではこのたびの合戰につき、十三万の同勢の采柄を取る軍師役に勤まりませぬ、無論軍師だけの動作は致しまする、去りながら十三万の同勢が拙者の指揮には從びますまい、何故なれば拙者は黒田の家來にいたして、陪臣の後藤又兵衛でございますから、兵士共が万事拙者の申條に服さぬは必定でございます、恐らく當城内の采柄を握り、關東の大軍を微塵に打ち碎かうといふ者は、只今紀州九度山村に居りまする眞田左衛門佐幸村軍師より外にはございますまい、このお方が入城致しますれば、この又兵衛も幸村軍師に從つて働きまする、まづ幸村軍師をばお招きなさるが宜うございませう」これを聽いた一同は思はずゝにさうだと手を拍ちました、このとき木村長門守重成もその

以前に片桐且元、大阪方の軍師を勤むる者は眞田幸村より外にはなからうと云つたことがございますから重成「いかにも後藤殿の云はつしやる通り、大阪方の采配を取る者は幸村軍師より外にはございませね、早々秀頼殿に御教書を乞ひ、これを持たせまして、紀州九度山村へ迎ひに參るが宜からうと考へます皆々「然らば幸村軍師を迎へやう」といふことに決りましたが、さて迎ひに參るのに困りました、何故かといふと、德川家康殿の方でも、最早合戰が近寄つて來たから、必ずや大阪から九度山村の眞田を呼びに參るであらうといふので、その警戒をば淺野但馬守に吩咐けました、これに依つて但馬守は九度山村の入口の所に關門を拵へまして、此所へ役人を出張らせ、誰彼なく出入の者を嚴重に檢め、眞田の方へ訝しい者が行かぬやうに、チヤンと固めてしまひました、これを見た幸村は幸村「イヤ德川の爺はなか〳〵倥呆がないわい、やがて拙者の所へ大阪から迎ひが

來るに決つて居るががう、嚴重に張られては困るであらう、ヨシ、そんならかういふ姿になつて這入りなさいといふ雞形を出してやらう」とズッとその邊へ立札を出しまして『このたび先祖の年回に相當いたし候ふに付、これが菩提の爲、修業者たるべき者には何人を問はず、錢百文、米一升、草鞋一足を施行いたすべきものなり』と書き現はしました、サア先祖の菩提の爲だといふから、巡禮だの、千ケ寺參だの、みなドン〳〵貰ひに來る、これに一々錢百文、米一升、草鞋一足をやつて居りました、固よりたゞ貰へるから流行する、これは今も昔も變りがございません、サア施行だと云へば、その前は黑山のやうな人集りです、併しかういふ邊鄙のことでありますから、日に二十人か三十人くらゐのものですが、その貰ひに行く奴をば入れぬといふ譯には行かない、關門の役人は一々調べなければなりませぬから、甚ろしい手數が掛りまする、役人は眞田めが碌でもな

いことを始めやアがつたと、みな呟いて居りました、然るに眞田幸村は、サア拙者を迎ひに來るのだつたら、乞丐遍路の姿となつて、内へ入り込んで呉れと云はぬばかり、そのすることに悾呆がございません、すると大阪城において、これを聞いた後藤又兵衛基次が、一同の勇士を集めまして又兵「このたび紀州九度山村の眞田幸村殿が斯樣々々の立札を出された趣これは大阪城から迎ひが參るといふことを知つて、關門の役人を欺き乞丐遍路となつて入り込めよといふ謎でござる、誰か乞丐遍路の姿になつて行つて貰ひたい、併し一通りでは關門の役人が承知をいたさぬであらう、誠に失禮でござるが、成るだけ顔の貧さうな、何う見ても乞丐遍路としか見ねぬお方を撰びますからどうかその役を勤めて下さい　○「オヤ〳〵、こりやア驚いた、餘りこの役には撰ばれたくないナ、貧さうな乞食顔だとよ、オイ〳〵鈴木、お前が面桶を持つて菰を被りやア恰ど乞食に見ねる

屹度撰ばれるのはお前だらう　鈴木「馬鹿云へ、乃公などは男が悪くつても品格がある、そりやアお前の方が似合ふよ」などゝ嗷々云つて居りまする、このとき後藤又兵衛はズツと一座を見渡しますと、大阪七手組の組頭郡主馬之亮といふ人がある、これはなか〳〵の豪傑でございますが、併し頭の毛が縮れ掛け、鬢の所がチヨイト禿げて、其上に齒が拔けて居るから、何所から見ても貧さうな顔です、このくらゐの豪傑に似合ない顔もあつたもので、この郡主馬之亮より外にはないと思ひましたから、又兵「主馬之亮殿　主馬「ハイ　又兵「其許にこの役目を勤めて貰ひたい　主馬「ハイ　又兵「失禮ではござるが、其許ならば何所へ出しても立派な乞食としか見ねぬ　主馬「コレサ後藤氏、大概にして呉れたまへ、手前も餘り立派な顔ではないが、何所へ出しても乞食としか見ねぬとは酷いぢやアござらぬか　又兵「イヤこれは賞めたのでござる　主馬「そんな要らぬことを賞て貰はぬでも宜い」といふと

一同の輩も、これは宜からうと思つたから　○「成程、郡氏は持つて來いだ、これは郡に限る、郡々主馬「コレ御一同、さう冷評して呉れては困る　△「いかにも尊公は乞食の顔貌だ」と嗷々囃し立てまする、郡主馬之亮も餘り好い心持は致しませんが、到頭この役は主馬之亮と決りました　主馬「然らば後藤氏、何時出立をすれば宜いのでござる　又兵「何時と云つてまだ急なことではない、そのうちにお出で下さい」と云つてその日は濟みましたがその晩になりますと、後藤又兵衛は主馬之亮を呼びまして　又兵「郡氏、どうか今宵の間に準備をいたし、翌日の朝御出立を願ひたい　主馬「左樣でござるか　又兵「今日万坐の中でまだ急なことはない、そのうちにお出で下さいと云つたが、あれは味方を謀る爲でござる、即ち敵を計らんとするには味方を計らなければならぬ、これは誰にも氣付かせぬが爲でござる　主馬「畏りました」と郡主馬之亮はその夜の中に遍路の準備をいたし、翌朝に和成り

ますと、笠を冠り、杖を突き、箱のやうな物を脊負ひ、スツカリ姿を變へまして、ヒヨツクリ〳〵と歩いて出ましたが、これは誰も知りません、かくて主馬之亮は住吉街道の方へ歩つて參りますと、恰ど今日早天から住吉の四社へ參詣をいたし、馬に乘りながら、今漸う向ふから歸つて參りましたのは、これぞ木村長門守重成、その七八人の供をして居る者が、往來の恐圖々〳〵して居る者に向ひ　家來「寄れ〳〵、脇へ寄らぬか」と云ひながら歩つて來まする、偶爾とこれを見た郡主馬之亮　主馬「イヤ向方から歩つて來たのは木村長門守重成だナ、拙者を郡主馬之亮と氣注くかしら、一度試してやらう」とズツと傍へ近寄りまして、主馬「旦那樣、難儀な遍路でござります、どうぞ一文の御合力を願ひます　家來「コラ〳〵乞丐、穢いわい、近寄るな〳〵　主馬「そんなことを云ふものぢやアござりませぬ、どうぞ一文やつて下さいまし　家來「穢い奴だ、近寄るなと申すのに」と供の者が追拂は

んとする、主馬之亮はなほも近寄り主馬「馬の上の大將樣、どうぞ御合力を願ひます」と云つたが、木村重成は郡主馬之亮とは氣が注きません重成「コリヤ〳〵儕輩、今日は住吉參詣の歸途なれば、何程か烏目を取らせよ家來「ハヽツ、コリヤ乞丐、これを遣はすぞ主馬「お有難う樣でござります家來「そんな聲を出すな」と云ひながら、ズツと行つてしまひました、その後蔭を見送りながら、思はず笑を含んだ郡主馬之亮が主馬「イヤ氣が附がぬと見ゑる、平生顏を見合して居る間柄ですらあの通り、これならば大丈夫、もう安心だわい」と大きに悅びまして、杖を突きながら、ヒヨツクリ〳〵と歩程を運ばせ、遂に紀州九度山村の入口へ來て見ますと、成程嚴重しき關門を拵へ、往來の者を一々吟味して居りまするは、則ち淺野家の役人でありますから、それぢやア一番この役人共を欺してやらうと、これから郡主馬之亮が關門を僞はり、首尾よくこの所を通り拔け、眞田幸村に面

會をいたし、秀頼殿の御敎書を渡し、大阪へ入城をいたさせまするといふ、餘程面白きお物語に相成りまする。

第十席

眞田左衛門佐幸村が紀州の九度山村に居りましたと云ふのはこれは全く事實でございまして、現今でも蓮華乘院へお出でになりますれば、眞田の物がチヨイ〳〵遺つて居ります、南陵も當講談を演じまするについて、彼の地へ參り、親しく取調べて參りましたが、九度山村に尼寺がござりまする、この尼寺に何か眞田の物が遺つてないかと、思つて聞いて見ましたが、此所には別に何もないさうです、併しこの尼寺に大きな松の木がございまして、その根方に稻荷樣のお祠がございますが、これは眞田が上田から勸請したものださうで、其所に安房守昌幸の墳墓がある、尙また現に六文錢の玉垣が殘つて居りますが、是等は

動かぬ證據でございます、さて開門へ騒りました郡主馬之亮が
主馬「ハイ、お願ひ申します 役人「何だ〳〵 主馬「エ、私は通路の者
でございますが、一寸開きますれば、この先方の眞田様のお屋
敷へ參りますと、米一升錢百文、草鞋一足を貰へます、さう
で、それを頂戴に參るのでございますから、どうぞお通しを願
ひます 役人「待て〳〵、いま檢めるでもらう 主馬「ヘイ、何所を檢
めますので 役人「其方の衣類を脫げい 主馬「エーッ、私やア裸體に
されますか、裸體にされちやア堪りませぬ、こんな所で追剝が
出るとは思ひませなんだ、どうぞお助けを願ひます 役人「馬鹿を
云ふな、役人が追剝なぞをするものか」と郡主馬之亮の衣類を
脫かせ、何か怪しい書面でも這入つて居りはしないかと、メク
と紙目を檢め了り、次ぎに冠つて居りました笠を脫がせ、メ
〳〵と引破つたから、飛いた主馬之亮が 主馬「モシ〳〵 旦那、そ
の笠を破られちやア騷動です、私や●また新調ねばなりませぬ

役人「黙れ〳〵 その代りに新しい笠を遣るわい 主馬「大き
に有難うございます、そんなら幾ら破つて下されても據
ひませぬ」と云ふと役人はまた杖を取り、ポキリ〳〵とこれを
三ツに打ち折りました 主馬「モシ〳〵、その杖を折られては困り
ます、私やア足が惡うございます 役人「杖も新しいのを遣るわ
い 主馬「オヤ〳〵それは大きに有難うございます、これで宜い、其方の背負
頭の髮の中なで檢べまして 役人「ヨシ、これで宜い、其方の背負
つて居る箱は何だ 主馬「ヘイ、これは人樣からお預り申しました
物を入れましたり、また彼方此方へお參詣をして戴きました、
お札を貼り附けました箱でございます 役人「開けろッ」と中を開
けて見ますと、小錢が少々と米が二三合舊い草鞋が一足這入つ
てある、併し內大臣秀賴公よりの御數書は何所へ這入つて居る
かと云ふと、後藤又兵衞基次が工夫をいたしたので、箱の蓋を
開けますと、蓋の裏に彼方此方の神社佛閣の札がベタ〳〵と貼